

北斗の拳 ISの章

世紀末だらけ人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

北斗神拳伝承者であるケンシロウはラオウを、そしてカイオウを倒し、世界の平和のためその命を戦いの中に捨て行こうとしていた。しかしケンシロウはユリアと同じ病にかかり、その頭上に死兆星を見るのであった。

目次

北斗神拳、未来へ立つ	1
甦った二人の兄弟	6
学園入学、動き始めた新たな時代!	
21	
我が友再び!	29
拳王再び	40
若き戦士、誓いの刻	51
鈴は鈴でもリンじゃない! 貴様は何者!?	
66	
忍びよる影、戦え戦士達よ!	82

北斗神拳、未来へ立つ

北斗神拳伝承者ケンシロウは死んだ。幾多の死闘を乗り越え地上最強の男になったケンシロウといえども病にはどう抗つても無意味である。

ケン「ユリアよ、俺も今そっちに行く……」

ケン「(初めて味わうのがこれが死というものか。思ったより以外と心地の良いものだ。)」

ケンシロウは死に行く自分がこの暗闇の中どこまで沈んで行くのか、不安を抱きつつも興味があった。沈んで行く先に一筋の光が見えた。

ケン「む、あの光は？」

光の中にあつたのは2つの椅子、そして見覚えのある一人の老人である。

ケン「あなたは師父リュウケン！何故ここに？」

リュウケン「来たかケンシロウよ、お前も遂に死んでしまったようじゃな。一子相伝の暗殺拳 北斗神拳をよくぞ極めた。無事に後継ぎにもその極意を伝えたようじゃの。説明すると儂、神様になったんじゃよ。」

ケン「神にだど？ 師父、訳がわからん。ここは死者達のいるあの世ではないのか？」

リュウケン「その通り！あの世じゃ。だがここでは原作など無視して皆仲良くやっておるぞ。」

ケン「原作？何のことだかわからんが、そうか、ここでは平和にやっているのか。ということはユリアやトキ、ラオウも？」

リュウケン「うむ、奴らに限らず南斗の者達も毎日飲み明かしている。」

ケン「そうか、今すぐ皆に会わせてくれ。」

リュウケン「残念じゃがケンシロウ、お主にはまた生き返ってやつてもらいたいことがあるんじやよ。」

ケン「何？生き返るだど？何のために？」

リュウケン「お前のいた時代から数百年後、また戦争が起こりそうなんじやよ。それをお主に阻止してほしいんじや。戦争による死者が大量に増えると儂が面倒なんじや。やつてくれるな？」

ケン「そんなことを急に言われても困る。とにかく皆に会わせてくれ。話はそれからだ。」

リュウケン「そう言うと思ったわい。もう呼んである。」

ケンシロウが後ろを振り替えると懐かしい影がそこにはあった。北斗の長兄ラオウ、次兄のトキ、三男のジャギにユリア。

ケン「ユリア、それに兄さん達……!? 会いたかった!」

ラオウ「フム、ケンシロウ。久しいな、お前の生きざま、見守っておったぞ。」
トキ「ケンシロウ、早速で悪いが師父の頼みだ。悪く思わないでくれ。」ピ

ブーーーーー!!

ケン「トキ!? 何をやる? 体が動かん……!」

トキ「お前が師父の頼みを拒まないように秘功をついた。言っておくが今の前でも自力で秘功は解けないぞ。」

ユリア「ケン、私も会って嬉しいのだけれどリュウケン様の頼みを聞いてあげてくれませんか? 北斗神拳伝承者のあなたにしかできないのよ。」

ケン「ユリアまで……。わかった、師父の頼みだ。引き受けよう。」

リュウケン「よく了承してくれた。流星は我が弟子よ。」

ジャギ「ふははは、ざまあねえなケンシロウ! まあ俺様も応援してやるから気を落とすなって笑」

リュウケン「ではケンシロウ、今からお前が行く時代に合わせてお前を15歳の年齢に戻しそれなりの見た目にする! なーに、身体能力や北斗神拳は失わないように

しておくから安心しておくがいい。あとお前にはある高校に通ってもらい、その生きていく過程で戦争勃発を阻止してほしい。良いかな?」

ケンシロウ「だいたいわかったが俺が学生として1人暮らしてできるか不安だな。一般の教養はあるとはいえ心配だ……」

リュウケン「そう言う事なら誰か後1人お供を着けさせれば良いかの? ラオウ、お主なんかどうじゃ?」

ラオウ「何を? そう言う面倒ごととはトキ、お前がやればよからう!!」

トキ「何を言っているラオウ! そういうことはジャギの得意分野だろう。ケンシロウを引き立てるのに丁度いいのでは?」

ジャギ「!? 冗談じゃねえよ! あの世がこんなパラダイスなのに何で俺様がケンシロウの!? 兄者こそ一番力になれるだろう!」

ラオウ「ジャギ!? 何を抜かすか! 許さぬぞ!」

トキ「まあ一旦落ち着こうラオウ。ラオウかジャギかどちらが手伝うか平和的にじゃんけんで決めたらどうだ?」

ラオウ「トキ!? キサマアーーー!!」

ケンシロウは思った。自分を除く三兄弟が喧嘩するほど仲良くなっていたのだと。少し嬉しく思うケンシロウであった。

結局じゃんけんした結果、ラオウが共に行くことになった。

ラオウ「ぐぬぬ：：、まさか俺の剛拳がトキにはともかくジャギにまで負けるとは：：！」

トキ「(如何にもグーが好きそうだからな．．．)」

ジャギ「(兄者が単純で助かったぜ．．．)」

ケンシロウ「兄さん、よろしく頼む」

ラオウ「ふん、まあよいわ。ケンシロウ、生き返ったらまた俺と命を賭けて闘ってもらうぞ。」

リュウケン「いや、死んだらダメじゃろ!!」

なんだかんだあってケンシロウとラオウはリュウケンの神の奇跡により転生として生き返ったのだった。

甦った二人の兄弟

ケン「ん、ここは？どうやら生き返ったようだが。」

ラオウ「うむ、いつのまにか俺の拳に手紙が握られておったわ。」

手紙を読むとそこにはリュウケンから今の状況を説明したメッセージがかかれていた。

・二人は15歳で今年の春にある高校に受験すること。

・二人の能力は死んでる時と変わらない状態である。

・この時代は “IS” という女性にしか扱えぬ兵器により女尊男卑の時代であること。

ラオウ「ぬ？ケンシロウ、受拳とはどんな拳法なのだ？」

ケン「ラオウ、受拳ではなく受験だ。つまり俺達の通うはずの高校に自分の学力で受かれといったところだろう。」

ラオウ「何!?!己リュウケンめく、謀りおったな!?!」

ケンシロウはともかくラオウはリュウケンに対して怒りをあらわにする。その怒りの闘気が周りの植物を枯れさせ、地面はひび割れゆく。

ケンシロウ「ラオウ、落ち着け。ここは世紀末と違って平和な日本だぞ。」

ケンシロウに抑止され、我に帰るラオウ。やれやれ、どっちがお目付け役なんだか。よく手紙を読めば受験の日程は明日と書かれていたので二人は町の見学と共に受験会場へ向かった。

ケンシロウ「会場はここか、随分立派な建物だな。」

ラオウ「ふん、せっかくだから中に入ってみるかケンシロウ。」

ケンシロウ「しかし今は受験の用意で立ち入り禁止だぞ。」

ラオウ「この程度の警備、雑作もないわ！」

警備員「おい、その二人。何をしているんだ！（デカイな……、学生か？）」

警備員に対しラオウは死環拍を突き、警備員を気絶させた。

ケンシロウ「ラオウ！死環拍はやりすぎだ。」

ラオウ「安心せい、全ての記憶を奪った訳ではないわ。ただ今日1日のことは全て忘れてもらう。」

そういうとラオウとケンシロウは校内へと人目につかないように入っていた。

ケンシロウ「ラオウ、これでは俺達はただの侵入者ではないか？」

ラオウ「貴様は一々五月蠅いやつだな。ん？ケンシロウ、あの教室にある機械

の様なものもその受験とやらに使うのか？」

ラオウが偶々見つけた教室の中には1台のロボットのようなものがおいてある。無論、二人にはこの機械が何なのかわからない。

ケンシロウ「ロボットか？この時代は進化しているんだな。」

なにも知らずに二人は機械に触れる。すると機械はいきなり光だし、二人の脳内に情報が入り込んでくる。

ラオウ「ぬああ!?!何だこの光は!?!ケンシロウ、何がどうなっている?！」

ケンシロウ「わからん!だが俺達がこの機械を作動させてしまったことに代わりはない。」

この騒動に応じて校内の警備員や受験関係者が一斉に集まってきた。

「お前達!そこで何をやって・・・、ISが起動している!?!馬鹿な、ISは女性にしか動かせないはず・・・。」

集まってきた全員が驚愕していた。IS、通称インフィニット ストラトスは女性にしか動かせないはずのパワードスーツである。それを動かした二人を黙って返すわけには行かないと、関係者達はとりあえず二人を不法侵入として拘束しようとした。

ラオウ「うぬらはこの俺を捕まえる気か?面白い!全員この地の骸と化してくれるわ

!!
」

ケンシロウ「ラオウ、落ち着け！ここはもといた世界ではないぞ!? 話せばわかるはずだ。すまなかったな、俺達は明日の受験のために会場の場所の下見に来たついでに勝手に中へ入ってしまった学生だ。あの機械に触ってしまったことも謝る。すまなかった。」

ケンシロウの謝罪に対し学校関係者達は彼らの行いを許した・・・、と思われた。が、

「君たちの反省は理解した。だがあの機械、ISをどうやって動かした？あの機械は女性にしか反応しない代物なんだぞ？それをどうして・・・!?」

ケンシロウ「あれは触ったら勝手に光輝いただけだ。」

ケンシロウの返答に頭を悩ませる女性達。そのリーダー格の判断で二人はあ
る場所で連行されることになってしまった。

ラオウ「ぐぬぬ、世紀末であれば貴様らごとき容易いものの、覚えておれよ女ども！」
ケンシロウにこっぴどく注意されたラオウは不機嫌ではあるものの、おとなしく護送車に乗り込んだ。怒りに満ちたラオウの鬨気が少し漏れ、車が通った回りの木々や花が枯れてニュースになるのはまた別の話である。

I S 学園 生徒指導室

千冬「で、君たちが受験会場に勝手に侵入し勝手に I S を起動させたという男性二人か。名前は何という？」

二人の前に椅子に腰掛けるのは織斑千冬、この学園の教師であり、かつての I S 操縦者世界一を決める大会の初代優勝者であるこの世界で一番強い女である。

ケンシロウ「俺はケンシロウ、こっちは俺の兄ラオウだ。」

千冬「ラオウ？変わった名前だな。(似ていない・・・、この二人本当に兄弟か？) 名字は何というんだ？」

ケンシロウ「名字か・・・、あえていうなら『霞』だな。」

ラオウ「貴様！我が名をばかにしおったな!？」クワツ!!

千冬「(ビクツ!!) す、すまなかつた。馬鹿にしたわけではないんだ。気にさわつたなら謝る。」

ケンシロウ「ラオウ、いい加減そのへんに。彼女も謝っていることだし。」

ラオウ「フン！命拾いしたな、小娘。」

千冬「本当にすまなかつた、今度から気を付ける。(こいつら本当に学生なのか!?) 私が萎縮するとは、しかも小娘呼ばわり・・・。)」

千冬は人生で初めて恐いと思える存在に出会ったと感ずるのであった。

千冬「そつ、それで話をまとめたんだけど、君たち二人は悪気があつて試験会場に入した訳ではないと。そして女性しか動かせないはずのISを何故か動かしてしまつたと。間違いはないな？」

ケンシロウ「うむ、その通りだ。迷惑をかけてすまなかつた。」

千冬「(弟の方は話を通じやすいな。) まあ侵入してしまつた件については反省しているようだし私の方で対処しておこう。ただな・・・、ISを動かしたことについては流石に面倒見切れん。今や君たちがISを動かした事は前代未聞のニュースとなつて世界中に広がつてしまつた。このままでは君たちの生活はおろか、世界中から君たちを手入れるため狙われることになるぞ。」

ケンシロウ「世界中とはまた話が大きすぎではないか？」

千冬「そんなことはない。ISとは一般の女性が装着するだけでも小国ぐらい簡単に殲滅できる兵器なのだぞ。今こそアラスカ条約によつて軍事利用は全ての国で禁止されて悪魔で新世代のスポーツ種目として利用されているがISは最先端の科学技術だ。全国家が一番躍起になつて研究していきり時代に突破りの男性操縦者。注目しないわけがない。」

ケンシロウ「そんな大きな問題であつたか。ラオウ・・・、これからの事をよく考えなければならんな。」

ラオウ「ふん、例え世界中の国が敵になろうともそれはそれで面白いではないか。そんなことよりケンシロウ、明日の受験とやらの勉強をしなければ受かる以前の問題だぞ？」

千冬「まで、君たちの受ける高校の名前を聞きたいのだから。」

ケンシロウ「たしか、I S 学園」といったな。まさか？」

千冬「今いるこの場所だな。しかしI S 学園は女子高だと言うのに何故受験しようとした？I S のことに関しても今や常識だというのに知らなすぎではないか？」

ケンシロウ「・・・片田舎から引越して来たばかりでな、世間にはあまり詳しくないのだ。」

千冬「そうか・・・。そんな君たちに提案があるのだが、I S 学園に入学しないか？そうすれば在学中は各国から狙われることは無くなるし元々入学希望だったのだろう？まあ無理には言わないが研究対象になりたくなければ入学することを勧めらる。」

ケンシロウ「わかった。俺達も面倒事にはまきこまれたくないのでな。その提案を受けよう。」

ラオウの意見は聞かずに話を進めるケンシロウ。ラオウも試験を受けずに済んだことを理解し話を聞き進める。

千冬「では入学手続きはこちらでやるとして君たちには明日の昼にちよつとした試験を受けてもらう。」

ラオウ「何い!?! 貴様、受験しなくてもよいようなことを先に言っておいたではないか!?!」

千冬「ま、まて!?! 試験といつても簡単なISによる模擬戦やちよつとした簡単なテストだ。結果がどうであれ君たちを不合格にすることはけしてない。」

ラオウの気にさわり焦る千冬。もはや世界最強の威厳などどこにもない。

ラオウ「ふん、始めからそう言っておれば怯えずにすんだものを。・・・ISによる闘いか、面白そうではあるな。久々に楽しくなってきたわ!!」

ケンシロウ「それではまた明日この学園に来る。その時はよろしく頼む。」

そう言うと二人はこの場をずかずかと立ち去っていく。二人の対応を終えた千冬はふう、と息を吐き、力なさげに椅子に座る。

千冬「あの二人はいつたい何者なんだ? これでは教師としての威厳もクソもないじゃないか・・・。私もまだまだだな。」

「だ、大丈夫ですか? 織斑先生? 良かったらコーヒーをどうぞ。砂糖多めにしときましたか・・・。」

千冬「摩耶か、ああ、ありがとう。頂くよ。」

千冬に摩耶と呼ばれる彼女は 山田 摩耶、この教師である。

山田「それにしてもすごい体のお二人でしたね。あれが今年から高校生とは思えないんですが、何者なのでしょうかね？」

千冬「わからん。ただ1つ言えることはあの二人は私より遥かに強い存在であるということだ。ISにおける戦闘はわからんがはつきりいって規格外だな。」

山田「えええ!? 織斑先生より強いんですか!? そんな子が世界にはいるものですね。」

千冬「そうだな、私も久しぶりに自分の力の無さを実感したよ。私も鍛えねばならんな。」

彼女達はケンシロウとラオウについて話し合い、明日の準備にとりかかった。

一方ケンシロウとラオウはリュウケンが用意した家へ向かう途中、腹拵えのため近くのスーパーに向かった。

ケンシロウ「ラオウ、所持金には限りがある。お互い必要なものだけを買おうではないか。」

ラオウ「よからう。ところでケンシロウ、今いくら持っておるのだ？」

ケンシロウ「・・・500円だ。」

ラオウ「な、何いゝ!?それだけでは精々1人分しか買えんではないか!」
ケンシロウ「だったらどうしろというのだ?それに俺達は水さえあれば1ヶ月は食べなくても生きられるだろう。」

ラオウ「納得がいかん!こうなったらケンシロウ!その500円、このラオウが貰い受けるわあー!!」

ケンシロウ「ラオウ!貴様が握るのは金ではなく死兆星だ!」

「お、お客様、店内で暴れるのはヤメテ——(泣)」

結局二人は店員や警備員、警察総動員で説得して何とか治まり、店から出禁を言い渡された。

ラオウ「強くなったな、弟よ。」

ケンシロウ「兄さん……。」

この日彼らは一躍して町の有名人になったのであった。

そして翌日、

ラオウ「ぐぬぬ、簡単な筆記と聞いておったのにふざけおつて!あの女あ、今度あつたらただではすまんぞ!」

ケンシロウ「ラオウ、今のは一般の中学3年までの教養範囲内だ。昔親父に

習っただろう。」

ラオウは筆記の試験中、迷いと怒りにより何十本もの鉛筆をへし折っていた。ケンシロウ「その怒りは次のISでの戦闘試験にぶつけるんだな。ただしやりすぎないように。」

ラオウ「わかっておるわ。北斗神拳は女は殺さぬ。」

二人を待っていたのは千冬であった。

千冬「待っていたぞ。早速始めようか。」

ラオウ「!? 貴様あー!! 筆記のどこが簡単だったか説明してもらおうか?」

千冬「えっ!? どころと言われても……。お、弟くんはできばえはどうだったのだ?」

ケンシロウ「無論、問題はない。学習を今まで疎かにしてきた兄が悪い。」

ラオウ「ケンシロウ、貴様ー!!」

ケンシロウ「それより早く始めたほうがいいんじゃないか?」

千冬「そ、そうだな。ISの戦闘試験は本来専門の試験管が担当するんだが今回は例外ということもあるので私が直々に行う。ではまず霞 ケンシロウ、君からそのISに乗ってくれ。乗ればあとは自動的にフィッティングされる。背中を預ける感じだな。」

ケンシロウが乗るとIS、打鋼が装備される。

ケンシロウ「(む、空を飛べるのはいが動きづらないな。)」

千冬「準備はいいか？これは試験だが君は初めての搭乗だ。好きなように動いてやれるだけの事をしてみる。無論、私を倒すつもりでな。」

ビーーーーッ、と開始音がなり試合が始まる。

千冬「どうした？来ないのか？それではこちらから行かせてもらおう!!」

千冬はケンシロウがIS初心者だろうとお構いなしにブレードで素早く斬りかかる。腕の立つ操縦者でも千冬の居合いを受けきるのはかなり困難である。ケンシロウは彼女の居合いに驚いたものの、無駄な動きをせず全ての斬撃をスウェイでかわし、指2本でブレードを受け止める。

ケンシロウ「驚いた。あなたがこれ程までの実力をもっているとは。」

千冬「私の剣撃を全てかわしたお前に言われてもな。」

ケンシロウの実力をわかつてはいたものの、千冬は小手調べとはいえ自分の剣が全く通じないことに驚きとワクワクを隠せないでいた。

千冬「面白い、生身の闘いなら今の時点で私の負けだったがこれはISによる戦闘だ！」

千冬は一旦距離を取り、それに対してケンシロウは千冬を追うように間合いを

とりつつ拳を握る。

ケンシロウ「ほあー!!」

ケンシロウが繰り出す拳は弾丸の如く千冬を狙う。千冬はそれを籠手を使って全力で防ぐので精一杯であった。ケンシロウの拳を受けた千冬の腕は一撃で破壊され、千冬は壁際まで突き飛ばされる。

千冬「がはっ!?!・・何という威力だ、左腕が使い物にならん・・」

ケンシロウはすかさず追撃に掛かるように千冬に接近する。この一撃が決まれば千冬の敗北は決定的である。

千冬「この戦いがISによるもので良かったよ。」

千冬はケンシロウをギリギリまで引き付け、寸の間で拳をかわしケンシロウの腹を目掛けて右腕で斬りさいた。

ケンシロウ「何!?!くっ、体が動かん・・!!」

千冬の渾身の一撃でケンシロウのISのシールドエネルギーは0になり、勝負は終了した。

千冬「ふう、一時はどうなることかと思ったが、まだ君はISの操縦になれてない。その弱点を一撃で突かせてもらったよ。そうしなければ慣れていない君とはいえ、私は間違いないで負けていたからな。」

ケンシロウ「うむ、まだ体が思うように動かせん。まさか敗北を味わうとは、久しいことだな。」

千冬「・・・一つ聞こうか。もし生身で戦つてたら何回私を殺せた?」

ケンシロウ「殺すことは決してしないが、10から先はわからんな。」

千冬「まったく恐ろしい回答だな。よし、君のテストはこれで終了だ。次は：ラオウ君、だと言いたいところだが、先にもらつた一撃でやれそうにないな。」

ラオウ「フン、俺に挑もうなど100年早いわ!しかしそのISとやらは試しに使わせてもらうぞ。」

千冬「ああかまわない。テストは私のほうで免除にしておこう。」

ラオウ「ふむ、確かにこれは思ったようには動けぬ。ケンシロウが反応できずに負けたのは理解した。」

千冬「ISは搭乗者本人の稼働時間によつて操縦技術は基本的に向上し体に馴染んでいく。上手くやつていけば生身と変わらない程度で空中を移動することができる。」

ラオウ「ほう、それは楽しみだな。ケンシロウ!うぬより先にこのラオウがISとやらを使いこなして見せようぞ。」

ケンシロウ「ならばラオウ、今この場で戦つてみるか。」

千冬「勝負はかまわん。ただしアリーナを吹き飛ばしたりはしないでくれよ。」

ラオウ「という訳だケンシロウ。うぬにはこの俺の糧となつてもらうぞ。」ゴキツ、バキツ！

ケンシロウ「俺は昔のケンシロウではない！」ポキツ、パキツ！

千冬「(あの打鋼、ブレード主体何だが・・・)」

千冬の考えを否定するよう二人はブレード等使わず、拳だけでぶつかりあおうと構え、全身全霊の拳をくりだす。

千冬「(まつ、まずい!?!何がかはわからんが、そんな気がする!?!)」

アリーナだけでなく辺り一帯の地域がこの二人を中心に揺れ動いていた。

ラオウ「天に滅つせい、ケンシロウアッアッアッアッ!!」

ケンシロウ「ホオオオオオアッアッアッアッ!!」

二人の拳はぶつかりあい、千冬はこの衝撃で死ぬのではないかと覚悟をした。

しかし、次におきた結末は予想外のことであつた。

拳がぶつかり合つた瞬間、二人のISは突如まったく別の機体へと変わり始めたのだ。

学園入学、動き始めた新たな時代！

ここは I S 学園、日本にしかない唯一の I S 専門の高校であり、優秀な I S 操縦者を育成するための場所である。今日は新入生が待ちに待った入学式、早朝から登校する者は辺り一面女性ばかり。その中一人だけ、男性が学園へと足を運ぶ。

彼の名前は 織斑 一夏。世界で初めての男性操縦者になっていたはずの男である。彼もまた高校受験当日に会場を間違え、たまたま I S 学園の受験会場にある I S を何故か起動させてしまった男である。実際男性で I S を最初に起動させたのはケンシロウとラオウなのだがこのことは I S 学園の関係者以外知らず、受験シーズンに大事にするのは面倒だと千冬が判断したため公にはまだ公表されていない。女性しかない中、入学式を終えた一夏は自分のクラスである 1-1 でホームルームを待っていた。

一夏「覚悟はしていたが、本当に女の子しかない……。なんて居心地の悪さなんだ……。それに……。」

女子一同 (ジューーーー)

一夏「(目線痛い……。)」

ホームルームはまだかとそわそわする一夏の願いは叶う。

ガラガラッ。

山田「皆さん入学おめでとうございます。私は担任の山田 摩耶 といいます。これから1年の間よろしくお願いしますね！」

教室に入ってそうそう挨拶をする山田に対して生徒は今だに一夏に注目している。山田は戸惑うも負けじと場を促す。

山田「じ、じゃあ名簿順に自己紹介をお願いしますでしょうか？」

自己紹介が始まり一夏は何を言えいいのか焦り迷っていたが、無情にも自分の順番が回ってきた。

一夏「ええと、織斑一夏です。」

とりあえず一言言い終えて前を見れば女子達は期待に目を輝かせている。

一夏「(なっ、ここで暗い印象が定着するのは不味い……。どうにかしなければ。)」

一夏は深呼吸をし、間を置く。女子達は「お？」と、言わんばかりの表情。

一夏「以上です!!!」

クラス全体が盛大にずっこける。

一夏「あ、あれ？ダメでした？」

瞬間一夏の脳天に出席簿が落ちてくる。スパアアアん!!

一夏「痛つてええ!? 何がおきて、げえっ千冬姉!？」

更に追撃の出席簿、一夏に効果抜群だ。

千冬「織斑先生と呼ばんかバカ者!!」

突如現れた千冬を見たクラスの女子は歓声を発する。

「キヤアアアアアー!!千冬様よ!サインください!」

「お姉様と呼ばせて!そして私を罵って!」

千冬は毎年恒例行事か何かと思い、彼女らを黙らせる。

千冬「で、お前はまともに自己紹介もできんのか?」

一夏「急に現れて何言ってるんだよ千冬姉え・・・」

千冬「織・斑・先・生　だ!」　スパアアアン!!

一夏が悶絶していてもスルーする千冬

千冬「お前達のクラスを担当する織斑千冬だ。お前達にはこの一年間でISに関する基礎知識や技術を全て叩き込む。一年以内に全て覚えろ。できなくてもやれ。私の命令には全てハイと返事をしろ!わかったな?」

生徒達「ハイ!」

ラオウ「うむ。」

ケン「・・・ハイ。」

生徒一同「え?」

千冬「お、お前達!? いつの間に教室に入ったんだ!？」

ケン「すまん、ラオウを止めることができなかった。」

ラオウ「この俺を待たせるなど百年早いわ!!」

突然の大男の登場に生徒一同は驚き思考が停止する。

千冬「はあー、仕方ない。最後に諸君らに紹介しなければならぬ者が二人いる。その男子2名だ。・・・自己紹介を。」

千冬に言われて二人は自己紹介をする。

ケン「霞ケンシロウだ。君たちと同様ここに通うことになった一年生だ。ケンと呼んでくれ。」

ラオウ「フン、ケンシロウの兄、ラオウだ。」

千冬「彼らは急遽発見された男性のIS操縦者だ。訳があつて公にはまだ発表されていないが時期に話題になってくると思う。仲良くするように。」

千冬は思っていた。彼ら二人が女子高生達と、一夏と親しくなるのには時間が必要であると。

しかし沈黙していた教室は千冬の予想とは裏腹に騒ぎだす。

一同「キヤーー!! 3人目の男子よ!!」

「しかも二人とも良い体格!!」

「あの太い腕に抱かれて見たいわ〜☒」

「二人とも兄弟なの？すごい筋肉してるね〜!!」

以外にも好評価である。

ラオウ「ええい、喧しいわ!!おい織斑!!」

一夏「えっ!?!は、ハイ!?!」

ラオウ「違う、貴様ではないわ!千冬、小娘らを静まらせろ!」

「え〜、ラオウくん冷たいなー。でもそんなところがまたステキ・・・☒☒」

「私はケンシロウ君派かな〜、クールな感じがどストライクだわ〜☒☒」

「でも単純なイケメンだったら織斑君じゃない?」

教室内は男子三人の話で一層騒がしくなる。

千冬「静かにせんか!!まだホームルームの時間は終わっていないぞ!」

千冬呼び掛けに反応し、生徒達はすぐ静まり返る。

千冬「彼ら二人はISに関してはまだ多くの初心者であり、基本的な知識もお前達と比べても差は歴然だ。できるだけでいい、彼らの手助けをしてやってくれ。」

生徒達「ハイ」

ラオウ「ふん、俺に手助けなどはいらぬ。」

「え〜!?!そんなこと言わずにさ〜?ねえーケンくん?」

ケン「そうだぞラオウ、ISに関しては彼女達のほうが上の立場にある。教えてもらったらどうだ？」

ソウヨ ソウヨ ハズカシガラスニサー キャーキャー

ラオウ「うっ、わかった、わかったから静まれい!!」

拳王と恐れられた彼も若い女性の集団にはかなわない。

ケン「(ラオウも随分丸くなったもんだな)」

時間は経過し授業に入るころ、

千冬「それでは授業に入る、つとその前に来週から始まるクラス対抗戦にむけてのクラス代表を決めておこうか。立候補、推薦は問わん。誰か候補者はいないか？」

ジャアワタシハオリムラクンヨー エエーケンシロウクンヨー ワタシ
ラークンガイイー

ラオウ「フン、くだらぬわ。俺は戦えるならクラス代表など誰でもよい！」

ケン「この際代表になってみたらどうだラオウ？」

ラオウ「王座など貴様らしくれてやるわ。それより俺は昼の学食とやらが楽しみでたまらんわ！」クワツッ!

ケン「(拳王とか自分で名乗ってたくせに・・・)」

ざわつくクラスは男子3人の名前が飛び交い更に盛り上がる。そこに横槍を入れる

女性が一人現れた。

「納得がいきませんわ!!」

クラス全体が彼女のほうを見る。

セシリア「イギリス代表候補生のこの私セシリア・オルコットが一年間そのような屈辱を——!!?」

どうやら彼女は男子がクラス代表になるのが気に入らないらしい。今の女尊男卑の時代、彼女のような人間は少なくない。ならば自分から立候補すればよかろう、と一夏とケンシロウは聞き流していたが。しかしこの「漢」は黙っていなかった。

ラオウ「先程から黙って聴いておれば小娘、この俺を愚弄するか!!」

セシ「なっ、なんですの、この野蛮なゴリラは!!日本ではゴリラを呼ぶほど人員にとぼしいんですの!?!」

ラオウ「この俺をゴリラ呼ばわりとは・・・、貴様、肝っ玉だけはでかいようだな!?!千冬よ!こやつと戦わせてもらおうぞ?」

千冬「あ、ああ。但し模擬戦だからな? (焦)」

ケン「ラオウ、落ち着いたらどうだ。女性相手に本気をだすなよ?」

セシ「まあ!?!貴方も私を侮辱しますの?」

ケン「悪気はないが、先にこの国を侮辱したのはきみのほうだろう?」

一夏「そつそうだ！イギリスだって不味い飯ワーストーで何年覇者だよ！」
言い返されるセシリアだが彼女の負けん気は大したものである。

セシ「もう許しませんわ！負けたら貴方たちは私の奴隷にして差し上げますわ

！」

一夏「え!?!俺たちも戦うのか？」

ケン「仕方ないな。そう言うことだ織斑先生。」

千冬「仕方ない、勝負は来週の月曜、第三アリーナで行う！」

ラオウ「首を洗って待つておくがよい。うぬの骨と共にイギリス代表候補生の
歴史を葬ろうぞ。」ゲエアハツハツハツハ——！！

ラオウの悪魔のような笑い声は学校中に響きわたる。

我が友再び！

一夏「という訳だ箒。俺にISの事教えてくれ。」

箒「それは貴様の問題だろうが。自分でどうにかしろ！」

彼女は篠ノ野箒。IS開発者である篠ノ野束の妹である。

箒「貴様がくだらん挑発にのるからだ！」

一夏「乗ったのはラオウだって！」

ラオウ「愚か者!! 貴様も男なら覚悟を決めぬか！」

一夏・箒「居たのかよ!?!」

ケン「ラオウがすまん。」

箒「揃いも揃って……。大体お前たちは何者なんだ? ただの高校生じゃあるまい。」

ケン「何度も言うが俺たちは偶々ISを動かし偶々強制入学させられたちよつと大きい高校生だ。」

一夏「本当かよ……。信じられねえ。」

ラオウ「フン、そんなことより箒といつたな? 俺にもISの事について詳しく教える

がいい!!」

箒 「何で私がお前たちに・・・」

ラオウ 「何か言ったか？」 ギロツ

箒 「ひっひいゝゝゝゝ!! わ、わかりました。私に教えられる事なら何でも!!」

一夏 「本当か箒? ありがとう、恩にきるぜ!!」

ラオウ 「一夏よ、俺に感謝するがいい!!」

ケン 「・・・わかってないな、ラオウは。ホワタアツ!」

ピブーーーーー

ラオウ 「ぬがああ!? ケンシロウ、貴様秘孔縛を!」

ケン 「ラオウ、少しは空気を読め。箒よ、兄が邪魔をしたな。だがもう少し自分に素直になつたらどうだ? 一夏に I S の事について教えてやれ。」

箒 「な、何の事だ!」
「・・・だが精進しよう。礼を言う。」

ケン 「さあ、行くぞラオウ。」

ラオウ 「ひ、引きずるでない!」

ケンシロウはラオウを引きずりながら二人の元を去る。箒は二人に対して苦手意識を持っていたがケンシロウのおかげで少し和らいだようだ。しかし彼らは I S についてどうするつもりなのだろうか?

一夏「な、なあ箒。教えてくれるんだよな・・・?」

箒「いいだろう、私が来週までみっちり鍛えてやる!」

このあと試合の日まで体のみを鍛えさせられた一夏であった。

ケン「そう怒るなラオウ。カップルに取り入ろうなど野暮だぞ。お前もあの女の気持ちに気づいていたはずだ。」

ラオウ「ふん、あれが俗に言うツンドラというものか。何とも筋の通らん物言
いよ。」

ケン「ツンデレだ」

ラオウ「愛など知らぬ!!」

ケン「もうつつこまぬぞ。・・・それよりラオウ、ISの事について教えてくれる先生を見つけたからその方に教えてもらえ。・・・入ってくれ。」

ガチャ

ラオウ「ぬっ!?!お、お前は!!」

布仏「ケンちゃんお邪魔します。ラーくん遊びに来たよ。」

ラオウ「ぐっ、ケンシロウ!何故この女を呼んだ!?!」

ケン「お前たちは仲が良いじゃないか。うつつけだと思っただが。」

ラオウ「お、俺は誰の施しも受けぬわ! お前は俺の体によじ登るな!! 布
仏エエー!?!」

布仏「今日こそは肩車してもらうから覚悟しろー笑」

ケン「仲良いじゃないか」

ラオウ「うるさいぞケンシロウ!! さっさと降りぬかー!」

布仏「えー? ラーくん冷たいな」。

ラオウ「ラーくんはやめぬか!?!」

ケン「じゃあ布仏、俺は行くところがある。ラーくんをよろしく頼むぞ。」

布仏「合点承知☆」

ラオウ「ケンシロウ!?!」

布仏「そんな大声出したら回りに迷惑だよ?」

ラオウ「ぐぬ、こやつに当たり前の事を言われるとは・・・!」

本音「心配しなくてもラーくんの面倒は私が見てあげますからね」。

ラオウ「貴様バカにしおって?!! (落ち着けラオウよ、俺は元々は20 中半の
大人。世紀末覇者拳王であるぞ。小娘の戯れ言など軽く流すのは当たり前・・・)」

本音「ラーくんお菓子食べる?」

ラオウ「ある分全て持ってくるがよい!!」

ドーン!

本音「ちよろい・・・」

I S 学園 生徒会室

ケン「ここが生徒会か、失礼するぞホワタアツ!!」

バン

勢いよく入るケンシロウの前に椅子に座っていたのは水色の髪をした容姿端麗な学生だった。

ケン「来たぞ更識。」

楯無「ちよつ、そのドアの開け方どうにかできないの!？」

更識楯無。この学園の生徒会長であり、同時にそれは学園最強を意味する。

ケン「それで俺に用があるのだろうか? 織斑先生からここへ来るように言われたんだが・・・」

楯無「いきなりね、もう少し私を見てお話とかしたいとは思わないの?」

ケン「そうだな、ユリアには及ばないが綺麗だな。」

楯無「それ誉めてるの? というよりユリアって誰よ・・・」

ケン「ユリアは今でも俺が愛して止まない慈愛に溢れた女性でそれはそれは綺麗で・・・」

楯無「あーはいはいわかりました。もう本題に入りましょう。」

ケン「むっ、そうだな。」

楯無「織斑先生から聞いたと思うけど私はこの学園の生徒会長の更識楯無。お姉さんって呼んでね☆」

ケン「よろしく頼む、楯無。」

更識「む、お堅い癖に名前で呼ぶのね。ちよつと変わってるかも。あなたにはこれから模擬戦までの間私がISの事について指導するよう頼まれたのよ。」

ケン「そうか、それは有難い。」

楯無「意外と素直なのね。そんなんじやいつか綺麗な女性に騙されちゃうわよ？」

ケン「信用は人の目を見れば大抵わかる。」

楯無「私信用されてるのね。」

ケン「先生の紹介だからな。」

楯無「あとあなたの、いえ、貴方たちのISについても話さなくちゃいけないことがあるの。」

ケン「?実技試験の時に変化したやつのことか?」

楯無「そうらしいわね。あの見たこともないIS、あれははっきり言って異常

らしいわ。世界で467しかないI Sのコアの内の2つはあの打鋼なのだけれどそのコア事態が突然変異してまったく別のコアに変わってしまったている。試合までには間に合わせるらしいけどまだ調査中とのことよ。」

ケン「なるほど、理解した。(・・・師父の影響か?)」

楯無「まだ貴方に聞きたい事がたくさんあるんだけど、貴方のお兄さんのことも。

まあそれは順々につてことで。これからよろしくね☆」

彼女は笑いながら持ち前の扇子を広げる。

試合当日

一夏「・・・なあ箒。」

箒「・・・何だ?」

一夏「俺I Sの事について教えてくれって頼んだよな? 試合までの間剣道の稽古しかしてこなかったけど・・・」

箒「し、仕方ないだろう。お前のI Sが届かなかったんだから!」

一夏「だけでもっと操縦の基本的なことかあっただろう? なあ・・・顔をそらすな!」

だ。
一夏と箒は何やらもめているようだ。ISの指導がうまくいかなかったよう

ラオウ「ふん、この俺があ金の髪を安いプライドと共に蹂躪してくれるわ!」

ケン「大分布仏に世話になったようだな。」

ラオウ「言うな、ケンシロウ……。思い出すだけで疲れる。」

本音「ラーくん頑張つてね〜!ファイトだよ。」

一夏「のほほんさんいたのか!?!」

ラオウ「もう驚かぬ……」

ケン「大変だったんだな。」

アリーナ口で集まる生徒達の元へ山田が駆けつける。

山田「はあ、はあ、3人も、ISが届きました!急いでください!」

ラオウ「やっと来おったか。ではゆくぞ!一夏、ケンシロウ!」

一夏「お、おう!じゃあ箒行つてくる!」

箒「一夏……。気をつけてな。」

男3人は届けられたISの前にそれぞれ立つ。

山田「これが織斑くんのIS、百式です!」

一夏の専用機 百式。灰色のボディに翼のような二つの大きなスラスターを

もつ近接係のISである。

一夏「これが俺のIS……」

一夏は百式に触る。

一夏「あれ？前とは何か違う感覚だな……」

千冬「織斑、時間がない。初期設定は試合中にやれ。」

一夏「わかった。……箒！」

箒「な、何だ？」

一夏「行ってくる！」　ドギューン

一夏は笑顔でアリーナへと飛び出した。

千冬「でだ、霞兄弟。お前たちはこっちだ。」

千冬は二人を別の部屋に呼び出す。

ラオウ「ふん、待っていたぞ！」

千冬「こっちの黒いISがラオウ、君のISだ。」

そのISは一夏の専用機より一回りでかく、ドツシリとした頑強なボディ。そして全てを砕かんとするような骨太なアーム。まさにラオウにお似合いなISであった。

千冬「そのISは解析が済んでない故にどんな力があるかまだ謎が多い。一つ言える

のは武器を何一つ装備してないということだが・・・」

ラオウ「この俺に武器など不要！それに薄々感じておったわ。こやつからは我が友のオーラを感じる。」

ラオウはISに乗り初期設定を開始する、と同時にラオウは確信した。

ラオウ（「フツ、やはりお前だったか。黒王よ・・・！」）

黒王（「ヒヒーン!!」）

ラオウのISは赤い鬨気を纏い動きだす。

千冬「こ、これは本当にISなのか!?まるでガ○ダムだ・・・」

ラオウ「フハハハハ!!今日からこいつの名は黒王、黒王号だ!!」

ドーーーー

ン!!

ケン「やはり、あの時の威圧感はこの黒王のものだったか!」

ラオウ「千冬、それに山田よ。ご苦労だったな、この俺の鬨い、存分に見届け
るがいい!!」

千冬「黒王号だけで衝撃的だと言うのに・・・、ケンシロウ。こつちが君のISだ。これも同様に解析しきれていなく、名前がない。ただ一つだけ武装にヌンチャク
の様なものがある。」

ラオウ「うぬのISも中々神々しいものだな」

ケン「うむ、感謝する。」

ケンシロウが受け取ったIS、それは黒王号とは違いスタイルの良い紺色ボディに分厚いアーム。胸部装甲には光輝く7つの傷痕。

ケン「きれいだな・・・」

千冬「私たちにできることはこれだけだ、後は己の実力のみ。・・・あまりやり過ぎないようにな。」

ケン「大丈夫だ、肝に命じておく。」

ラオウ「そもそも簡単に壊れるあの競技場が悪い。」

専用機を手にしたケンシロウ達。心配そうにラオウを見ていると第一試合は終了していた。一夏はセシリアに惜しくも敗れ、ラオウの番がまわってくる。

ラオウ「高まつてきおったわ！行くぞ黒王号！」

ドギューン

セシリアに史上最大の危機が迫っていることをこの時まだケンシロウ以外知るよしもなかった。

拳王再び

一夏との試合を終え休憩を挟むセシリア。多少疲れが見えるものの、一息つき気合いを入れなおす。

セシリア「織斑一夏・・・、あの男はIS初心者のはず・・・。なのに私に最後まで張り合い、私は負ける寸前まで追い込まれた・・・」

セシリアの脳内には一夏の戦う姿が何度も映し出される。

セシリア「(男は野蛮な生物だと思っていたのに・・・、何故こんな気持ちになるのかしら・・・)」

セシリア「い、いけませんわ! 次の相手はあの野蛮なゴリラ、あの男が織斑一夏のような殿方とは思えませんわ!」

セシリアは教室であつた一悶着を思い出す。

セシリア「思い出しただけで腹が立つてきましたわ。あのゴリラ、絶対に許せませんの・・・!!」

怒りを隠せないセシリアは休憩を終えると、ラオウをアリーナで迎え撃つ。彼女はセシリア・オルコット、イギリス代表候補生。男に負けは許されない、女だが。

アリーナ上空

セシリア「遅かったですわね……。随分大きいISですけど尻尾を巻いて逃げたのかと思いますわ。」

ラオウ「何とでも言うがいい小娘!!戯言はいい、さつきと始めるぞ!」

「それでは試合開始いい!!」

セシリア「男だからと言ってもう油断しませんわ!!あなたのようなデカイのは私のブルー・ティアーズによって蜂の巣になりなさいな!!」

上空からセシリアは目掛けて正確にライフルで狙ってくる。多少動けるからと言って、流星はイギリスの代表候補生。ラオウには全弾命中、高出力レーザーは黒王号のシールドエネルギーを確実に削っていく。

セシリア「ふん、とんだ期待はずれでしたわね。この程度も避けれないなんて。まだまだ行きますわよ!!」

ラオウ「……………」

セシリアの攻撃を受け続けるラオウ。シールドエネルギーは確実に減りなが

らも雨のようなレーザーを耐え続ける。試合は誰もが観ても一方的であった。．．．ただひとり、ラオウは密かにニヤリと笑う。その笑みを見たセシリアに悪寒が走る。

セシリア「(な、何なんですのあの笑いは!?! 私の攻撃を受け続けてあの余裕．．!?)」
 攻撃を一旦撃ち止め、セシリアは警戒体制に入る。

ラオウ「小娘、もういいのか? 貴様は先の闘いで疲弊しておろう。対等にするには些か足りんぞ?」

セシリア「あなた、まさかわざと攻撃を受けて．．!?!」

ラオウ「この俺と対等に闘おうと言うのなら当たり前のことよ。」

千冬「まったく恐ろしい奴だ．．．、普通の人間ならあの猛攻を受けた時点で大怪我だろうな。」

ケン「しかしシールドエネルギーが無くなれば無傷とはいえ負けなのだろう?」

一夏「そうだけ千冬姉。スピードならまだセシリアのほうが上なんじゃないか? いくら何でもラオウの攻撃が当たらないなら．．．」

千冬「先生と呼べと言っただろ! 岩斬両山破!!」

一夏「あわびゆ!?」 ドカーン

ケン「まだ甘いが見事だ!」

千冬「一夏、何も近接系統の機体の攻撃手段が相手に殴りかかる事だけではない。ラオウの戦いをよく見ておけ。」

一夏「痛てえ、痛てえよ千冬姉……。どういう意味だ?」

セシリア「つ、強がるのもいい加減にしなさいな! 次の一撃で終わりにしてあげますわ!」

ライフルからレーザーが放たれラオウに襲いかかる。セシリアがこれでフィニッシュだと、安堵したその油断がまさに命取!!

ラオウ「ぬううん!」

ラオウの右手に赤黒い鬨気が集まり、そして

ラオウ「 北斗神拳 二指真空波 」

レーザーはラオウの右手に捕まり、手首を返すようにしてレーザーの槍はセシリアに投げ返される。セシリアは反応する暇もなく直撃を受け体勢を崩されてしまう。何が

あつたのかセシリアは理解できず戸惑いをみせる。

一夏「すつすげえ・・・、レーザーを掴んで投げ返したぜ!」

千冬「そ、そうだ! ああいう戦いかたもあるということだ。わかつたか一夏?

(いやいや!?!レーザーを掴んで投げ返すなんて出来るわけないだろ!!)」

ケン「あれぐらい北斗の男なら当然だ。」

セシリア「ぐっ、・・・あなた本当にI S初心者ですの!」

ラオウ「初心者だからどうした? 死合が始まれば誰が相手だろうと全力で戦えばよかろう!」 ドーン!!

ラオウの発する大声はアリーナ中に響き渡り、試合を見ている者全ての心にラオウの言葉が突き刺さる。

ラオウ「初心者・熟練者・男に女、そんな肩書きなどどうでもよい! ただあるのは生か死か!! 真剣勝負にこれ以上のものなどいらぬわああ!!」 ドーン!!

ケン「兄さん・・・(泣)」

一夏「かつけえぜラオウ・・・、男の中の『漢』だ!」

千冬「もう何がなんだか・・・」

山田「ラオウ君、格好いいですねく／＼／＼」

セシリア「：：どうやらあなたという人の事を少々誤解していたようですわ。でも：：
!!私だって負けるわけにはいかないんですの!!」

セシリアは再びライフルで狙撃する。勿論二指真空波で返されることを理解した上で。

ラオウ「あまいわ!」

ラオウはレーザーを返そうと構えを取る。しかし、

セシリア「一か八か・・・、フレキシブル!!」

ラオウ「!?」

ラオウに目掛けて放たれたレーザーは突然湾曲を描きラオウの横を過ぎていく。

ラオウ「隙あり!ドオリヤー!!」

ラオウはレーザーが外れたと同時にやつとかと言わんばかりにセシリアに急接近、その姿ミサイルの如し!セシリアのBT兵器の攻撃を掻い潜り渾身の力を拳にこめて近づく。

セシリア「掛かりましたわね!」

ケン「む、あれは？」

一夏「セシリアのレーザーが曲がってラオウの背後に!？」

千冬「この土壇場でBT兵器の高等技術とは・・・」

レーザーはラオウの死角から襲いかかる。セシリアはそれと同時に隠れてあつた2つのビットからミサイルを放つ。セシリアが今できる全力の攻撃、最早交わす術はない。

だがそれは常人ならではの話。

ラオウ「ぬうん！」

北斗神拳 無 想 隠 殺

セシリア「な!？」

ラオウは死角からのレーザーをミリ単位で首かすめない程度にかわし、左手でもたもやレーザーを掴みミサイルを掴んだレーザーで切り裂く。セシリアはもはや隙だらけ。

ラオウ「楽しかったぞ小娘、我が拳の前に塵と砕けよ！」

悪魔の微笑みはセシリアに恐怖を生み出す。絶対防御があるはずなのに、死なないはずなのに、セシリアは今まさに味わった事のない感覚、「死」を感じた。

北斗神拳奥義 北斗剛掌波

アリーナには爆音が響き渡り、土煙が視界を塞ぐ。

一夏「ど、どうなったんだ!？」

千冬「おおお、落ち着けいい一夏!き、救護班は直ぐに準備を!」

ケン「いや、大丈夫だ。」

千冬「何!？」

ケン「ラオウは本当に丸くなったな。彼女の意識はある。どうやら止めはささなかつたようだぞ。」

BGM s i l e n t s u r v i v o r

セシリア「・・・どうしてですか?何故止めを・・・」

ラオウ「たった今安いプライドに囚われていたセシリア・オルコットは死んだ、

今ここにいるのは闘いに敗れ新たな自分と向き合おうとするセシリア・オルコットただ一人！」

セシリア「ラオウさん……」

ラオウ「体を厭えよ、オルコット。このラオウ、いつでも貴様からの挑戦を受けようぞ！」

アリーナ中から試合に対する歓声が響き渡る。まさか一年がこれほどの熱き闘いを繰り広げようとは。

ケン「どうやら俺とセシリアの試合は無さそうだな。」

セシリアは全力を出して負けた。これほど清々しく負けたせいかな自然と笑顔でラオウを見つめる。

ラオウは立ち上がりケンシロウ達のもとへ飛んでいく。その姿、まさに闘いの神インドラの化身!!

ラオウ「グハハハハハハ！拳王恐怖の伝説は今より始まる!!ケンシロウ〜！この俺の命、奪いたくばいつでもくるがいい！」

この日地球に世紀末覇者が復活した。

審判「織斑先生、オルコットは試合続行不可能と判断されましたので霞ケンシロウとの試合は彼の不戦勝にしますが・・・」

千冬「ああ、それでかまわない。オルコットのISは一度整備班に預かってもらうように言っておいてくれ。」

審判「了解しました。・・・しかし2試合戦ったオルコットを不戦敗にするのも後味悪いですね。」

千冬「上層部からは男子生徒の戦鬪データを取るように言われている。ケンシロウにも試合はしてもらおうつもりだが・・・」

千冬「というわけでケンシロウ、君には織斑・ラオウペアと1VS2で試合をしても

らう。アリーナの使用時間はもう少ないから10分間としてラオウには5分遅れで出てもらうがいいか？」

ケン「かまわん。」

一夏「まじかよ千冬ね、織斑先生・・・、嫌な予感しかない。」

千冬「織斑、男にはやらねばならん時がある。」

一夏「何か悟ってないか千冬姉・・・？」

千冬「がんざん・・・!!」

一夏「わ、わかりましたああ！織斑一夏、死ぬ気で頑張らせてもらいます!!」

ラオウ「俺が出るまで逃げ回ってもよいのだぞ？」

話は決まり、運命の最終戦。男がぶつかる死闘 開始iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!

若き戦士、誓いの刻

空には隅々まで蒼天の晴れ模様、外で運動するにはもってこいの天候。1人、織斑一夏はアリーナ上空にそびえ立つケンシロウの前に百式を展開し飛んで行く。

ケン「来たな一夏よ、互いに悔いの残らないよう拳を交えよう。」

一夏「くっ、こっちだっただでは負けねえ……！勝負だ！」

ケン「迷いは消えたようだな」

一夏（とりあえず5分食い付いていけばラオウが来る……、それまで耐えてチャンスが来たら一気に叩く!!）

「試合開始iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

やけにテンションの高い審判の声と共に試合は始まった。

箒「一夏！相手は強敵だ、とりあえずお前は防御に専念しろ！」

一夏「言われなくても……！」

ケンシロウは一夏に向かって突撃、拳を振るう。一夏は反応が遅れたが専用武器の雪片で何とかこれを捌く。

一夏「ぐっ、何て威力だ……!?一発貰ったら即アウトだぞこれ!」

ケン「どうした？守ってばかりでは俺には勝てんぞ！あくたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたた！！」

更にラツシュをかけるケンシロウ。一夏は全力でこれをかわす。一夏の百式はセシリアとの戦いの中ファーストシフトを経て本来の姿に変化し、その機体性能は格段に上がっている。百式とのシンクロ率も相まってケンシロウより僅かに行動が速い。

一夏（何とかこれなら受けられる！今なら・・・！）

一夏「うおおおおお——！！」

ガキイイン！

一夏の剣は惜しくもケンシロウの拳に防がれた。

ケン（この剣・・・、レイに似たものを感じるな）

かつてライバルであり友であった南斗水鳥拳のレイを思わせる太刀筋と感じたケンシロウ。単なる気の迷いだろうか、一旦一夏から距離を取る。

一夏「行ける！あのケンシロウとやりあえてる！」

対等だと思ひ浮かれる一夏は掌を握ったり開いたりを繰り返す。

千冬「あの馬鹿者・・・、浮かれているな。」

山田「え？でも調子が良いように見えますけど？」

千冬「さつきから掌を握ったり開いたりしているだろう？あの癖が出るとき大抵あいつは簡単なミスをする。」

山田「流石姉弟……！よく見ていらっしやるんですね！」

ラオウ「ベ、バーこん……」

箒「それはブラコ……」

千冬「何か言ったか篠乃？」ポキツポキツ

箒「何でもありません！すいませんでした!!」

ラオウ「うぬ、ケンシロウに似てきておらんか？」

一夏はこのままケンシロウに斬りかかる。ラオウが来るまであと1分。その前に決着を着けようと言わんばかりの攻め様。ケンシロウが動きに慣れる前に、攻撃を受ける前に。

ラオウが来るまであと30秒

ケン「あたっ！」

一夏「ぐっ!!」

一夏はケンシロウからカウンターを貰いそうになり左腕で受ける。いや、受けてしまった。

ケン「一夏、お前はなかなか面白いやつだ。戦いの中どんどん強くなっている。」

一夏「何だよ急に？今流れは俺の方にあるんだぜ！」

ラオウが来るまであと20秒

ケン「お前ももっと強くなれる。いずれは大事な人を守るために命を捨てそうな男。焦らず一歩ずつ強くなれ！」

一夏「何を言ってるやがる！今は戦いの最中だろ!？」

一夏はケンシロウに向かって斬りかかる。零落白夜発動！

ラオウ「・・・惜しい男よ、一夏」

ラオウはゆっくりとアリーナへ飛び立つ。ラオウの一言を千冬は理解した。そうか、あの一発でもう試合は終わっていたのだと。

お前はもう死んでいる

一夏「うおおおおお!!」

3

2

1

・・・

ケン「0だ！」

ピブ

ミシミシミシツ　ボヒューーン　グシャアア

一夏「うわああああああ!?」

ケンシロウのカウントダウンともに百式の両腕は爆発、木つ端微塵になる。一夏の最後の剣はケンシロウに届くことはなかった。怪我はしていないものの、両腕がない今、雪片を握ることができない一夏。悔しがる一夏をケンシロウは悲しい目で見つめる。一夏の後ろにいたラオウもまた然り。

千冬「言わんこつちやない、私でさえ彼に稽古をつけてもらっているのだから、当たり前前だ。」

山田「でも織斑くんもすごい頑張りましたよ。」

箒「一夏……」

観客席からも一夏を称える声援が贈られる。

ラオウ「ふん、うぬにしては惜しかったな。あとは北斗の闘いを見ているがいい！」

一夏「ちくしょう! やっぱりに徹するべきだったか……」ブツブツブツ
ラオウ「……」

ヒコウ　トウイ!!　　ギャ——!?

ケン「哀れな、一夏よ。」

ラオウ「ふん、敗者は去るがよいわ！」

千冬「またしてもこの二人の対決を見ることになるとは……、全教員は緊急事態に備えて待機！少しでもアリーナのシールドが危険だと感じたら生徒を避難させろ！救護班も準備にかかれ！」

千冬の指示により万全な体制が構築される。たったあと4分の試合だというのに、その対決の危険度は空を見れば誰でも納得いくものである。先程まで快晴だった蒼天は黒雲に染まり強風が渦を巻く。まるでラオウとケンシロウを中心に世界が回っているかのように。

一夏「痛てて……、いったいこれから何が起きるんだ？」

箒「お前生きてたのか……。」

一夏「まだ頭が出っ張ってるけど何とか。」

千冬「おいお前たち、早くシールドの内側に……、織斑、その頭どうした？」

一夏「その内元に戻るさ！」

千冬「まあいい。早くシールドの内側に戻れ。闘いに巻き込まれるぞ！」

救護室

セシリア「・・・どうやら寝てしまっていたようですわね。」

戦いの疲れからか眠りに落ちていたセシリア。アリーナからのざわめきに
より目を覚ます。

デカイ看護婦「おやあ？今起きたのかい嬢ちゃん？これからとんでもないバトルが始
まるわよ！ヒヤッハー!!」

セシリア「!?そういうえば次はたしか・・・!」

あわててモニターを見るセシリア。二人の闘いの波動に導かれたのか、彼女の心は踊
り始める。

セシリア「彼らの闘いが本当の『闘い』だというのなら見逃す訳にはいきませんわ!」
I S 学園全体を震撼させる二人の闘いが今始まる!

BGM 〈 b e g i n n i n g o f t h e l e g e n d

ケン「いくぞラオウ!」

ラオウ「来いケンシロウ、雌雄を決せん!」

二人の体、機体から闘気が溢れだし、互いに相殺しあう。

千冬「おそらくだがこの闘いは一撃で決まる……！」

学園の全人間が唾を飲み、静かに見守る。そしてアリーナに稲妻が落ちる！その瞬間こそ闘いの合図！

ケン「ポウ——！」

ラオウ「ジョイヤ——！」

二人は高く飛び上がり勢いをつけて互いに向かいあう。

ケン「北斗七死騎兵斬」

ラオウ「ドリヤ——！」

ドギヤ——ン

拳の衝撃は学園に留まらず近隣の街や施設にも響き渡る。海浜地域では津波に嵐、地上では震度5の地震。二人は地上に着地し互いに背中を向けている。どちらが勝ったのかまだわからない。ただわかるのは先に動いた方が負けであるということ。

一夏「どつちが勝ったんだ!？」

ミシツ

音はラオウから聞こえてきた。瞬間黒王号の右腕は爆散、勝ったのはケンシロウである。

ラオウ「ばつばかな・・・!?」

ケン「天地を砕く剛拳もこの一握りの拳を砕くことはできぬ！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ———!!

観客席から大喝采、拍手の嵐。空はいつの間にか蒼天に変わり、鬨いは終わりを告げた。

一夏「すげえ・・・、これが北斗の鬨い！」

千冬（学園が壊れなくて良かった・・・）

山田「ケンシロウくんも凄かったですけどラオウくんも惜しかったですねー

！」

箒「バ、バケモノだな・・・」

セシリア「すごい、これが殿方の本当の鬨い・・・、ラオウさん・・・／／／

／

ラオウ「ケンシロウ、今回は貴様の勝ちだ。負けを認めよう。だが・・・この俺にも

生き返つてなお目指すものができたわい。」

ケン「ラオウ・・・、いい死合だった。」

生前、過去に一度も交わることもなかった拳が今ようやく重なりあう。

審判「以い上で本日の試合は全て終了とするううう！アリーナ内の生徒は全員移動開始いいいい！」

千冬「どうやら無事に終わったな」

一夏「あの審判の先生やけにテンション高かったよな？」

箒「知らないのか一夏？あれは審判や実況をやらせたら右に出る者はいない千葉しげ子先生だぞ？」

山田「そうですね。すごく優しくして元日本の代表候補生で私の先輩です！」

しげ子「くおおらあくそこの生徒く！早く移動せんか〜!?」

一夏「・・・女だよな？」

箒「女だ。」

山田「女です。」

試合後 生徒寮にて

箒「今日は残念だったな一夏」

一夏「まあ仕方ないさ、俺はセシリアともケンシロウとも全力で戦ったんだ。悔いはないさ！」

箒「そうか・・・、そうだな！お前は良くやった！」

一夏「あ、そうだ箒。」

箒「何だ一夏？」

一夏「試合前に俺を鍛えてくれてありがとうな！また時間があつたら頼めるか？」

箒「な、なんだそんなことか／＼／＼、礼には及ばん！私はお前の力になれたのだからそれで十分だ／＼／＼予定が合えばいつでも稽古をつけてやるから遠慮はいらん！」

一夏「おう！頼りにしてるぜ！」

一夏（今日俺は目標を見つけたんだ！絶対強くなってあの二人に、ケンシロウとラオウに追い付いて、大事な人達を守れる男になるって！）

生徒会室

楯無「いやーまさかケンシロウくんがあんなに強いなんて正直お姉さんドン引きしちゃったわよ。」

ケン「手加減は相手に失礼だからな」

楯無「だからって一夏くんの両腕が爆発した時は本当にびびったわよ？」

ケン「あれは北斗神拳の奥義の一つ、五指烈断と言って・・・」

楯無「その北斗神拳についてちょっと調べさせてもらったわ。」

ケン「何？」

楯無「元々中国で2X00年前に創始された伝説の暗殺拳・・・、秘孔という人間の部位をを自らの闘気を纏った指や足で突いて内部から破壊する憲法と言ったところかしら？」

ケン「どうやってそれを？」

楯無「私の家系も代々昔から日本の政治を裏から支えてきたものなの。本気をいせれば調べられるわ。」

ケン「以外としつかりしているんだな」

楯無「レディに向かって失礼ね！そんなんじや同級生の子にモテないわよ？」

ケン「俺には愛しのユリアが・・・」

楯無「で話はこつからよ。」

ケン「・・・(ω・ω・ω)」

楯無「調べた結果、歴代の伝承者の中で偶然にもあなたと同じ名前を2つ見つけたのよ。一つは62代目の霞拳志郎、そして64代目のケンシロウ。こんな偶然中々ないと思うけど。」

ケン「・・・」

楯無「もしかして貴方はこの時代の人間ではなく過去の人間だったりして：」
ケン（この子には話しても大丈夫だろう。）

ケン「そうだ。俺は元々第64代北斗神拳伝承者ケンシロウだ。霞は師父の性からかってに付けた。」

楯無「やっぱり！私って探偵の才能あるかも？」

ケン「流石としか言いようがないな。楯無、この事は・・・」

楯無「大丈夫よ、私口が固いほうだから！にしても過去の、しかも亡くなった人間が現代についてどういう原理なのかしらね？」

ケン「ラオウも同じく伝承者争いに加わった血の繋がらない俺の兄だ。何故甦ったのか理由はわからん（流石に戦争が起きるなんて知ったらまずいからな）」

楯無「そう、不思議ね。何故貴方達がこの時代に来たのか・・・、何かとんで

もない事がおこるんじゃないかしら？」

ケン（鋭いな）

楯無「まあ気になった事については解消したことだしケンシロウの祝勝会でもする？
お姉さんがたっぷり労ってあげるわよ？」

ケン「ユリアはこんなにはしからん女ではない！」

楯無「じゃあユリアさんって人がエツチな事してるのを想像してみたら？」

ケン「何？」

楯無に促され妄想するケンシロウ。途端にケンシロウの鼻から大量の血が噴き出す。

ケン「ぐはあああああ——!?!」

楯無「ち、ちよつと！ケンシロウくん!？」

ケン「む、無念・・・」バタツ

楯無「冗談だったのに、案外男の子してるじゃない？面白いだから笑」

この日人生で初めてケンシロウは女性に負けた。

鈴は鈴でもリンじゃない! 貴様は何者!?

クラス代表決定戦の後日、いつもの変わらない日常。1組のホームルームの時間に夏は一人叫ぶ。

一夏「何で俺が代表になってるんだよ千冬姉!」

千冬「先生と呼ばんか!! 剛の拳!!」グワアツ!

一夏「ぎえ——!?! 痛えよ!!」

ケン「朝から騒がしい奴だな一夏は。」

ラオウ「千冬……。恐ろしい成長速度よ……。!」

千冬「いい加減教師と生徒の関係を覚えろ! 霞兄弟とオルコットは事前に辞退の申し出があったから繰り上がりでお前が代表になったのだ。」

一夏「だからって全敗した俺が代表で言い訳ないだろ?」

セシリア「私、反省致しましたの。殿方達の事を理解もせず、横暴な発言して無様な試合を晒したことを。それにやはりここは男性の方に代表になってもらうほうがいいと思って……。、(本当はラオウさんになってもらいたかったけど)／＼」

セシリアは謝罪の意を込めてこの場で発言する。彼女の誠意はクラスメイトや教師にも伝わったであろう。あのラオウとの全力の試合を見た彼女達になら。

ケンシロウ「良かったなラオウ。彼女はおまえに惚れたみたいだぞ！」

ラオウ「どうでもよいわ。俺の心を奪いたくば殺す気がかかってこい！」

ケン「セシリアも前途多難だな。」

北斗の者に内緒話は無駄、セシリアが漏らした声は二人に筒抜けである。

一夏「だったら俺だって辞退するって・・・」

ケン「ホアタアツ!!」 ピブ——

ケン「お前はもう代表になる、と言う。」

一夏「何を言って・・・あっあれ？口が勝手に『代表になります!』」

千冬「そうか、じゃあこの件はこれでしまいだ。授業に移るぞ。」

ケン「随分やる気じゃないか一夏、応援するぞ。」

一夏「何でこうなるんだよ！」

ラオウ「ふむ一夏よ、俺がお前のその貧弱な体を代表に恥じぬよう鍛えてやろ

う。」

一夏「不幸だ・・・」

クラス代表は織斑一夏に決定

千冬「ではこれよりISに関する実技訓練を行う。全員準備した後グラウンドに集合！」

ラオウ「着替えなど教室ですればいいものを・・・何故更衣室まで移動せねばならんのだ？」

一夏「女子と一緒にじゃ着替えられないだろ？」

ラオウ「見られて恥ずかしいなら奴等が退けばよからう！」

ケン「レディーファーストと言う言葉を知らないのか？」

一夏「早く着替えないと千冬姉に怒られ・・・」

ケン・ラオウ「フン！」　ビリビリビリビリ

一夏「・・・」

ケン「鍛えればお前もこれぐらいできるぞ？」

一夏「お前らと一緒にするな！」

ラオウ「おい、早く着替えろ小僧！」

一夏が着替え終わるのを待つと3人はグラウンドに向かう。巨漢であるケンシロウとラオウに挟まれる一夏、廊下に出れば只の見せ物にすぎない。

一夏（・・・もつと体鍛えよ・・・）

夕刻

??? 「・・・ついに来たわよ。ここがIS学園、ふふふ、私が転入したって聞いたたら夏のやつ驚くだろうな。」

IS学園に立つ一人の少女、彼女の名は鳳鈴音。中国から転校してきた代表候補生である。

鈴「この中国代表候補生、鳳鈴音がIS学園の生徒達の度肝を抜いてやるわ！」

彼女は男勝りな性格で基本的に怖いもの知らずである。

鈴「そうと決まればさっそく誰か学生の人を探して・・・」

鈴の背後から人の声が聞こえてくる。何やら楽しそうな感じだ。鈴はその声

がするほうへ歩み始める。

鈴「ちよつとそのあんた、聞きたいことが・・・」

校舎から出てきた人を見て鈴は思わず立ち止まった。

ラオウ「ふざけた時代へYO〜こそ!君はたつぽ〜い たつぽ〜い たつぽ〜い たつぽ〜い たつぽ〜い!!」カアッ!

ケン「YOUはSHOCK!! 愛で 空が 墜ちてくる〜!」ドンッ!

立ち往生する鈴に向かって二人から放たれる音の衝撃波は彼女を軽く吹き飛ばす。

ケン「やはりクリキンこそが北斗の王道・・・!揺らぐことはない!」

ラオウ「何を言うかケンシロウ!?盛り上がりで定評があるトムキャットの右に並ぶものなど無いわ!」

言い争いをして自分に気づいていないのか?鈴は大柄な男二人にびびったものの、それに負けじと二人に突つかかる。

鈴「ちよつとそのあんたたち!いきなり大声で叫ばれたらびつくりするじゃない!」

ようやく気づいたのか二人は鈴の方に目線を下ろす。

ラオウ「何だ小娘？俺に何かようか？」

ケン「ラオウ、相手は子供だぞ？そんなに威嚇することはないだろう。日が暮れるから家まで送ってやろう。」

鈴「私は子供じゃな——い!!私は高校生だ！」

ケン「お前のような高校生がいるか。」

鈴「その言葉そっくりそのまま返すわよ！」

ケン「それで君は誰なんだ？」

鈴「ふん、私は鳳鈴音！IS学園に明日から世話になるわ！」

ケン「何リンだ?!」

鈴「何よ？文句あるわけ？」

ケン「(同じ名前でも性格や品にこれ程の差があるとは……)」

ケン「お前は断じてリンではない!!」ビシィッ

ラオウ「うぬに同意」

鈴「もう何なのよこいつら……」

それから程なくして……

ラオウ「つまり貴様は小学生ではないと?」

鈴「散々話して伝わったのがそれだけか!」

ラオウ「うるさいわ!そもそもお前の転校の理由が小学生のそれではないか

!

この女、鈴は元々中国の代表候補生としてI S学園への推薦入学の誘いが来ていたのだが、本人の性格上興味の無いことには近づかないと推薦を一蹴、幼なじみの一夏のI S学園への入学の話題を聞きつけ、駄々をこねる小学生の如くI S学園への早急な編入手続きを急遽政府に押し付けたのである。

鈴「別にいいじゃない!私がどうしようかとあなたには関係ないでしょ!」

ラオウ「大方貴様は一夏の事が愛しいのであろう。見え見えだ。」

鈴「なっ、ななな何言ってるのよあなたは!?!別にそんなじゃないわよ!」

／／／

ラオウ「ふん、あやつの回りには同じ様な女しかあつまらんのか。」

ケン「・・・話が逸れているぞ。つまりリン(仮)は愛ゆえに一夏の元へ国の

国境を越えて遥々中国から・・・」

鈴「もうそれでいいわよ!わかったら早く案内しなさい、と思っただけど話が長くなりすぎて疲れたわ。あいつに会うのはやっぱり明日に・・・」

ケン「愛があるなら迷う事はない！今すぐ一夏の元へ・・・」

ラオウ「小僧を奪いたくば命を賭してでも奪い取れ！時間は待ってくれぬぞ

！」

鈴「あああああもう何なのよアンタ達は——！！！」

鈴は堪らず二人から逃げ出した。彼女の学園生活もまた波瀾万丈である。

鈴「もう何なのよあいつらはく！！結局一夏に会えなかったじゃない・・・ていうか
IS学園の制服着てたわよね？それじゃあいつらが噂の・・・」

ラオウ「まったく度胸のない女だ！あれが北斗神拳創始国の代表候補とは。」

ケン「年頃の女性の扱いは難しいな。」

ラオウ「うぬう」

翌日

箒「一夏、もうすぐ学年別トーナメントが始まるな。」

一夏「そうだな。入学してからいろいろありすぎて忘れるところだったぜ。」
ケン「やけに落ち着いているな、修行の成果が出てきたみたいだな。」

セシリア「あら? 一夏さんはケンシロウさんに教わっているのですか?」

ケン「俺ではなくラオウだ。前の試合から就寝前にしごかれていたそうさ。」

一夏「ラオウって意外に面倒見がいいんだよな、驚いたよ。セシリアも一緒に(身体を)鍛えてもらえばいいんじゃないか?」

セシリア「ラオウさんと一緒に(ISの)訓練・・／／／ぜひ私もご指導に
いただきたいですわ!」

一夏「おう! 一緒に強くなろうぜ!」

ラオウ「貴様ら勝手に決めるな! どうしても言うなら対価としてコンビニの
スイーツを買ってこい!」

一夏「何い!? そんなの聞いてねえよ!!」

ラオウ「授業料と心えい!!」

セシリア「でしたらそのような物よりかは一流のパティシエに作らせたスイー
ツを今度ラオウさんにお持ち致しますわ!」

ラオウ「オルコットよ、俺の修行は厳しいぞ!」 ドンツ

一組の朝は男子がいる分他クラスより賑やかで騒がしくもある。その中心にいるのはほとんどケンシロウ、ラオウ、一夏の3人である。ただし、今日に限っては隣の二組のざわつき程ではなかった。

「ニュースよニュース!!二組に専用機持ちの子が転校してくるんだってー!!」

エエマジー? マサカ4ニンメノダンシー? オンナノコラシイヨー

箒「聞いたか一夏、専用機持ちが二組に転校してくるとは・・・」

一夏「ああ、だけど今さら驚きはしないさ。」

ケン「ラオウ、もしかすると昨日の女の子かもしれないぞ。」

ラオウ「あの喧しい小娘か、喜べ一夏!」

一夏「ケン達は知ってるのか?」

ケン「詳しくは知らんが昨日夕方に偶然話しかけられてな。」

一夏「面白そうだな、1回会いに行ってみるか!」

と、転校生の噂話をしていると教室の扉が勢いよく開かれる。例の転校生の登場である。

鈴「このクラスに織斑一夏はいるかしら?二組のクラス代表が直々に会いに来てやつ

たわよ!」

ドンッ

一夏「あれ? 鈴! お前もしかして鈴じゃないか!」

鈴「そうよ! 中国代表候補生 鳳鈴音よ! 久しぶりね一夏!」

箒「一夏、あいつは知り合いなのか?」

一夏「ああ、箒は知らないんだっけか? 昔の幼なじみだよ。」

箒「なっ、幼なじみだと!? 聞いてないぞそんなこと?」

一夏「そんな大きい声だすなよな。簡単な話、箒がファースト幼なじみで鈴がセカンド幼なじみ見たいなもんだ。」

箒はそれを聞いて少し安堵し、鈴はムッ、と彼女に対抗心を抱く。

ケン「昨日ぶりだなリン(仮)、本当に高校生だったんだな。」

鈴「ていうか何であんたがここにいるのよ!」

ケン「新聞ぐらい読んだらどうだ? 今頃世界中に知られていることだぞ。」

鈴「うるさいわよ! ていうことはあのゴリラも・・・」

ラオウ「誰がゴリラだ!!」

ラオウは鈴の背後から頭を鷲掴みにする。

鈴「ちよっ、まっ!?! いたたたたたたっ!! やっぱりあんたかく! ごめん! 謝るから――

ラオウ「代表候補生と言う奴らは礼節を知らんのか？」

鈴「死ぬかと思った・・・」

ケン「昔のラオウだったらお前はもう死んでいる！」

一夏「命拾いしたな鈴！」

鈴「何であんたは平然としてんのよ・・・」

箒「自己紹介がまだだったな。私は篠々乃箒、よろしく頼む。」

互いに握手をかわす二人、その行為とは裏腹に二人の眼には絶対に譲らない、という火花が飛び散っていた。何をとは言わないが。

セシリア「みんな！私のことを忘れてもらってわこまりますわね！私の名はセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生ですわ！以後お見知りおきを」

鈴「あそう、よろしく。」

鈴はセシリアに対しては素っ気ない態度で返事を返す。彼女にセシリアのことは眼中にないようだ。

セシリア「まあ？何ですのその態度は!?ムカつきますわ〜！」

鈴「それよりアンタらよ！アンタら！確か一夏以外の男性IS操縦者よね」

ケン「俺は霞ケンシロウ、あと兄のラオウだ。」

鈴「ふーん、名前は覚えたわ！まあ一組のクラス代表は一夏らしいからそこまで期待

してないけどいつか戦えるといいわね。」

自信満々に宣戦布告する鈴に対して周りの者達はざわつく。この女、何にもわかっていない。

一夏「ま、まあ仲良くしようぜ?お互い初対面なんだしき……。そう言えば鈴、俺に何か用事があつたんじやないか?」

鈴「そうだったわ!一夏、あのね……。昔にしたあたしとの約束覚えてる?」

一夏「ん?ああ覚えてるぞ!確か料理の腕が上がったら毎日酢豚を奢ってくれるってやつだろう?」

鈴「……。は?」

一夏「だから酢豚を毎日奢ってくれるって約束だっただろ。ん?間違ったかな?」

鈴「意味が全然違うのよ!!」

一夏「何だよ!この約束に何か違う意味があんのか?だったら詳しく教えてくれよ!」

鈴「はく!?で、できる訳ないじゃない!!//>////」

一夏と鈴の言い合いに周りの者達は注目する。唐変木は一夏には鈴との約束の本当の意味など理解できるはずもなく、他の女子達は大体事の内容を理解し、鈴を哀れに思

う。

鈴「もういいわよ！今度の代表戦で私が勝ったら土下座して謝りなさいよ!!」

一夏「いいぜ。もし俺が勝ったら約束の本当の意味とやらを教えてもらうからな！」

鈴「なっ!?!////い、いいわよ！上等じゃない！」

長かった話し合いがようやく終わった、と誰もが思った。が、またしてもこの男が割って入る。

ラオウ「でかい口を叩くな小娘が！」

鈴「何よあんた！あんたに話すことなんて何も無いのよ！噂じゃ意味不明な拳法使いつて聞くけど代表になれなかったんだから一夏より下ってことじゃない!:.:いいわよ、ついでにあんたの実力も見てみたいし今日の放課後アリーナで模擬戦をしようじゃない！」

箒一夏ケン「(またこの流れか.:.:)」

セシリア「(前の私を見ているようで鈴さんには何も言えませんか.:.:)」

ラオウ「驕るな鳳！貴様など俺が殺らざとも一夏で十分だ！」

ケン箒一夏セシリア「(お、持ちこたえた!?)」

鈴「上等じゃない!じゃあついでに今度の代表戦で私が一夏に勝ったらあんたも土下座してもらおうからね!」

ラオウ「なぬう!?!」

鈴「あら、自信が無いのかしら?でももう遅いわよ!絶対土下座させてやるんだから!」

ラオウ「やはり自らの手で解らせるしかないようだな?」

ケン箒一夏セシリア「(駄目だったか——。)」

一夏「(ていうか俺のことをもつと信用してくれよ・・・泣)」

やつとの思い出話は終わり、鈴は自分のクラスに帰って行つた。

一夏「何なんだよあいつ?約束ならちゃんと覚えてたじゃないか!」

ケン「お前はもう少し他人の気持ちを理解できるようにしろ。」

箒「馬に蹴られて死ね!」

一夏「何なんだよお前らまで!?!」

そして放課後、鈴とラオウはどうなったかと言うまでもなく・・・、

ホクトゴウシヨウハ—— チュドーン!!
鈴がラオウに逆らわなくなったのは言うまでもない。 イヤア——!?

忍びよる影、戦え戦士達よ！

クラス対抗戦まであと1週間、1組の代表である一夏は2組の代表である鈴との勝負に備え、ISの操縦の練習真つ只中である。

一夏「うおおお——!!」ギョオ——ン

ケン「遅い！」ガキインツ

一夏「また零落白夜を止められた!？」

ケン「武器を振るうのに無駄に力むな、瞬間的に力を爆発させろ!どんなに破壊力がある剣でも振るう瞬間を根元で抑えてしまえば通用せん!ほあた!」ズンツ

一夏「がはっ!？」

腹に一撃をくらった一夏はアリーナの地面に力なくふらふらと着陸する。

ケン「よし、俺は今日はこちらまでにしておこう。」

一夏「げほっ、げほっ・・・、ありがとなケン!やつぱり近接の戦いはケンから学ぶのが一番だぜ!」

ケン「だが俺もISの操縦にまだ完全に慣れていない。技術に関して言えばセシリアのほうが上だ。鳳はそれ以上かもしれんぞ?」

「一夏「そう言えばラオウは鈴と戦ったんだっけ？何か鈴のISのこと知ってるのかな？」」

ケン「甲龍といったか？ラオウが言っていたな。だが知っていたとしてもあいつはお前に教えないだろう。」

一夏「だよな。今できることをやるしかないか。」

ケン「よし、じゃあ次はセシリアの番だな。」

セシリア「待ちくたびれましたわよ一夏さん。」

一夏「近接の次は間接か。よし、セシリア頼んだぜ！」

セシリア「私も前に戦った時とはちがいますわよ！ブルーティーズ！」 シャキーン

ケン「SEがある以上銃撃を食らったところですからすぐ負けにはならん。肉を斬らせて骨を断て！狙撃主に距離を取らせるな！」

一夏「うおお！」

セシリア「生憎今の私は狙撃だけじゃありませんのよ！インターセプター！」 ガキーン

ケン「剣しかないお前がセシリアに遅れを取るな！力ではお前が上だ！」

一夏「おらあぁあ——！」

セシリア「ビットの存在を忘れていきますわよ!」ピュン

ケン「空気の流れを感じとれ!盲目でもそのくらいかわせる者を俺は知っているぞ!」

一夏「えっ?ちよつ、う、うおお——!!」

セシリア「3連フレキシブル!!バーン!!」ギギューン

ケン「激流を制するは静水!!」

一夏「意味がわからねえーよ!」チュドーン

ケン「今日は終いだな。よく耐えたな一夏。俺が教えたお前にできそうな技は毎日練習しておく。」

一夏「ぜえ、ぜえ・・・、終わったー!!」

セシリア「一夏さんの腕もかなり上達していて驚きましたわ。私もうかうかしていられませんわ!」

一夏「セ、セシリアだっていつの間にあんな技を・・・」

セシリア「ラオウさんに完敗して以来、私決めましたの。ラオウさんを倒して認めてもらうためなら努力は惜しまないと!私もまだまだこれからですわ!では御二人方、先に失礼しますわ。」

ケン「・・・あの子は間違ひなく国を代表する者になるだろう。一夏、俺たちも行くか。」

一夏「ケンは先に行つてくれ。少し休んだら行くよ。疲れすぎて死にそうだ・・・」
ケン「わかった、それと一夏。劍の戦い方については俺より箒に教わったほうがためになる。我流もいいがまずは基本を教えてもらえ。じゃあな。」

寝転ぶ一夏にアドバイスを残すとケンシロウはアリーナを後にした。

一夏「箒にか・・・、あいつ教えてくれるかな？」

生徒会室内

楯無「ええとつと、話すのは初めてよね？」

ラオウ「・・・貴様がケンシロウの言つていた生徒会長とやらか？」

楯無「ええ、更識楯無よ。会長、もしくは楯無ちゃんって呼んでね！」

ラオウ「ふむ、肝は座つているようだな。して、貴様は俺とケンシロウの正体が何故わかつた？」

楯無「別に対したことじゃないわ。北斗と言つたら暗殺拳、それを代々私の家系は知識として知つていただけ。そしてあなたの弟の名前がケンシロウ、もちろん最初は疑つたわよ？ だけどあなたたちの強さを目の当たりにしたら間違ひはずがないわ。」

ラオウ「ほう、貴様も並の人間ではないようだな。それで話はそれだけか？」
楯無「そうね、本題に移りましょうか。単刀直入に聞くわ！あなたたちの目的は何？」

ラオウ「（この女・・・）」

ラオウは言葉につまる。自分たちの目的、そしてこの世界の未来についてこの女に語るにはまだ早い。戦争により、男より戦える女が血を流す将来、あまりにも残酷な運命を変えるためやってきたなどと流石のラオウでもまだ口にはできない。つい先日 の出来事を思い出す。

数日前　　く夜中く

ラオウ「む、ここは？」

ケン「ラオウ！お前もここにいたか。」

ラオウ「ケンシロウか？一体この空間はなんだ!？」

二人の会話に入り込んできたのは久しぶりの顔である。

リュウケン「わしじやよ、わし！」

ケン「親父！音沙汰無しかと思えば急に来たか。」

ラオウ「貴様の仕業か！今はドラえもんの時間だ！早く元の部屋に戻せ！」

リュウケン「いい年してな〜にがドラえもんじや。少しは話を聞かんか！」

ケン「それで、親父が来たからには何か大事な話があるんだろ？」

リュウケン「そのとおりじや。二人とも、大事な話じや。心して聞くがよい！……あの世の裏方で大きな力を持つ存在が動いておる。お主らのいた世界に対して悪い方向へ進ませよう、もしかしたら既に刺客が迫っておるやもしれん。」

ケン「何？どういうことだ親父!?!」

リュウケン「実は戦争が起きると言う話、あれは何者かによる未来改変から起きたことなんじや。」

ラオウ「何？神である貴様をも凌ぐ力なのか？」

リュウケン「それはわからん、ただ未来を変える力というのはお前達の思う以上に強大じや。只者では無かろう。」

ケン「……親父、俺達はこの先どうすればいい？」

リュウケン「いずれは避けられぬ戦いが必要起ころ、それに備えるのじや！」

ケン「俺とラオウ以外にも戦える者達を募ればいいのか？」

リュウケン「いや、それだけでは足りんじゃない。お前達で戦える戦士を育てるのじゃ。幸いなことにISの操縦が上手い者が世界中からIS学園に集まってきておる。お前達でその者達を導くのじゃ！」

ラオウ「馬鹿馬鹿しい！爺！貴様は女を戦いの駒にしろとでも言うのか!?そんな手は借りぬ!!俺の拳でその黒幕とやらを叩き潰してやるわ!!」

北斗神拳は女を殺さず。北斗の掟を破れと、師父から言われたかのようにラオウは怒りを闘気に変えて表す。

リュウケン「ラオウよ、気持ちにはわかる。しかしお前とケンシロウ二人で世界中の間を守れると思うか?北斗神拳と言えど不可能な話じゃ。人々が一人一人強くならなければ、身を守る強さを誰かが教えてやらねばその者に待つのは残酷な未来だけじゃ。」

ラオウ「……ふん。約束はせんぞ！俺はその黒幕を潰すまでだ！」

リュウケン「……ケンシロウよ、時期にまたお前達の前に現れる。それまでの間用心するのじゃ！」

ケン「……わかった。」

話が終わりリュウケンが姿を消すと残された二人は光に包まれ元の世界に戻る。

る。

ケン「!?」ガバッ

ラオウ「起きたかケンシロウ、忌々しい夢だったな。」

ケン「ラオウ・・・、やることは大体決まったな。」

ラオウ「知らぬわ！リユウケンめ、ドラえもんの代償は高くつくぞ!!」 クワッ

!

ケン「おい。」

ラオウ「・・・目的など俺達にはない。それに俺達が何故現世にいるのか、その答えなど時期にわかる。」

楯無「・・・どうしても答えてくれないの?」

ラオウ「くどい！俺は何も知らぬ！話がそれだけならもう帰らせてもらうぞ！」 ド

リヤー!!

ラオウはずかずかと生徒会室を後にする。

「か、会長・・・。あまり彼を怒らせないほうが・・・」

楯無「心配しなくても大丈夫よ。少なくとも女の子に手をあげる人じゃないから、彼。」

「しかし……」

楯無「ええ……。あの扉の開け方はどうにかならないのかしら？」

「あの世」

トキ「師父、ケンシロウとラオウは上手くやっているでしょうか？」

リュウケン「トキか。今のところまだ問題はないがこれからが不安じゃ。」

トキ「師父、私が暗躍する者の正体を突き止めて来ます。あなたの力をお貸しください！」

リュウケン「そう慌てるなトキ、既にこちらでも動き始めておる。素晴らしい御方にな。」

トキ「と言いますと？」

リュウケン「お主らには会ったことのないものじゃ。知らせがあるまで待つとしよう。それにお前、いや、お前達にはあやつらの手助けをしてもらおうと思うておる。」

トキ「……私と、ジャギですか？まさか私たちもケンシロウ達の元へ？」

リュウケン「ジャギが暇そうにひとつたからのう。それに今のわしでは蘇生できるのは4人が限界じゃ。」

トキ「また随分都合の悪い数字・・・、わかりました。ジャギには私が伝えておきます。」

リュウケン「うむ、頼んだぞ。」

く現世く 学年別クラス代表戦当日

アリーナ上空には一組代表の一夏と二組代表の鈴が対峙していた。

鈴「逃げずに出てきたようね。」

一夏「誰が逃げるか！こっちはお前を倒すため死ぬ気で特訓してきたんだぜ！」

しげ子「両者準備はいいか？！」

一夏「いつでもOKだぜ！」

鈴「とっとと始めましょう。」

観客席

ケン「修行の成果、見せてもらおう。」

箒「頑張れ・・・一夏!」

ラオウ「だがあの小娘も中々の力を持っているぞ?」

セシリア「ラオウさんは鈴さんと1度戦ったんでしたっけ?」

ラオウ「うむ、俺の剛掌波を受けてもすぐ立ち上がれるほど根性はあったぞ。」

箒「・・・それはギャグ保証では?」

ラオウ「ギャグ?」

ケン「もういいから、始まるぞ。」

しげ子「死合開始iiiiiiii——!!」

鈴「行くわよ一夏!!」

一夏「うおお!!」

鈴のIS専用装備「双天牙月」と、一夏の雪片が激しくぶつかりあう。

鈴「おらあぁー!!」 ギギギギギギ

一夏「ぐう!重い・・・(機体のパワーじゃ鈴が上か!?)」

鈴「どうしたの一夏!?! そんなもんじゃないでしょう!!」

競り合いに耐えかねた一夏は一度鈴を振り払い上昇する。再度勢いを着けて雪片を振るい、対して鈴も牙月で対抗する。

ラオウ「あやつ、小さい割には一夏より力があるな?」

ケン「流石に代表候補生と言ったところか。一夏の攻撃にあらゆる体制から対処している。」

箒「ラオウ、甲龍のスラスターにあるあの砲門はどうゆう武器なんだ?」

ラオウ「知らん。」

セシリア「噂じゃ私のティアーズと同じ第3世代の武器らしいですわ。」

箒「まだ使つてこないということは使うまでもないということか?」

ラオウ「ならば使わせざるおえない状況にすれば早いことよ!一夏もまだ本気ではなからう!」

ケン「いずれにせよこのままでは拮抗したままだな。」

千冬「織斑のやつ、大分特訓してきたようだな。それに鳳のやつも一夏に恐れを全く

抱かないもの凄い威勢だ。」

山田「織斑くん、ケンシロウ君やラオウ君達ともものすごい特訓してましたもんね！鳳さんはラオウ君に負けてから何かあったんでしようか？」

千冬「・・・何かあったに違いないな。」

鈴「（一夏のI Sはあの雪片だけけど単一仕様能力が使えるのよね。それは喰らったらやばそうだけど・・・）」ガキーン

鈴「あいつ（ラオウ）のあのビーム（剛掌波）と比べたら全然恐怖なんて微塵も感じないわぁー!!」ガキーン

一夏「うわぁっ!?クソ・・・!!」

鈴「一気に行くわよ!」

一夏「何!?!」

突き飛ばされた一夏は体制を立て直す。しかしその間に鈴のスラスタアの砲門「龍砲」から衝撃が放たれる。

ドガアア——ン!!

一夏「ぐわぁ——!?!」

箒「一夏!!」

ラオウ「何？砲弾が見えなかったぞ!？」

ケン「・・・あの感じ、もしや羅漢仁王拳!？」

セシリア「何ですのそれは？」

ケン「いや、言い過ぎたな・・・、おそらくだがあの砲台は空間事態に圧力をかけてそれを砲弾として打ち出す、いわば目視できない大砲と言えるだろう!？」

箒「それはあの武器には死角がないということか!？」

ケン「・・・完全ではないがほぼそういうことになるな。」

ラオウ「あのような隠し玉があったとは・・・、面白い!？」

セシリア「このままではやられてしまいますわ!!」

ケン「無論、一夏もこのままでは終わらん。」

ラオウ「ケンシロウ、一夏に何を吹き込んだのだ?？」

ケン「今にわかる!？」

箒・セシリア「??？」

一夏「ちつくしよー! 見えない砲撃なんてありかよ!?! 今は捕まらないように動き回って隙をつくしかねえ!？」

鈴「くっ! 仕留めきれなかった! ちよこまかと!?!」

一夏は鈴を囲うように動き回った。一瞬でもいい、最大火力をぶつけられる隙を伺うのだ。シールドエネルギーがなくなる前に。

一夏「俺に残された秘策は千冬姉に教わったイグニッションブーストとケンに教わったあれ・・・、カツコ悪いけど関係ねえ!!」

一夏「行くぞ鈴!!」 ヒュンツ ギューーン!!

鈴「なっ!?イグニッションブースト!!」

一夏「行つけえー!!うおおおー!!」

箒「速い!行け一夏——!」

ラオウ「小僧、まだ詰めが甘いわ。」

鈴「くっ!舐めんじやないわよー!!」

鈴の死角から瞬間加速で距離を詰める一夏に対し、驚異的な反応を見せる鈴。牙月を素早く振り回し何とかこの攻撃を受けるが、勢いのある一夏に地表近くまで叩き落とされる。

鈴「くうっ!」

一夏「このまま押しきる!!」

鈴「そ・う・は、いくか——！」

鈴は一夏のスピードとパワーを利用し牙月を引くことでした。一夏をかわし、一夏は地面に激突する。

一夏「ぐわああ!!」

鈴「これで終わりよ一夏!!龍砲!!」

一夏を地面に激突させ鈴は振り返りすぐさま龍砲を放つ体制をとる。発射まで約2秒。鈴は勝ちを確信した。観客席の生徒達もほとんどの者が終わったとそう思った。しかし、鈴が龍砲を発射する直前に見えた一夏の顔はまだ諦めていなかった。

鈴「!?!」

一夏「とっておきは最後まで取っておくもんだぜ!!今だ!!跳刀地背拳!!」

ドガアア——ン!!

煙が立ちこめる中、鈴は龍砲が一夏な当たっていないことに気づく。

鈴「一夏はどこ!?!」

一瞬、一瞬見せた鈴の隙を一夏は見逃さない。鈴の真上になつて忍び寄り一夏は雪片を振り回す。

鈴「上!!」

一夏「はああ——!!」ガキーン

鈴「きやあ!？」

ラオウ「ケンシロウ、あんなクソ拳法を・・・www」

ケン「一夏に教えられるものがそれしかなかった・・・www」

箒「い、一夏wwwあの体勢はwww」

セシリア「フフフwww一夏さんwww」

ラオウ「奴の名前は次からフォックス織斑と名付けようぞww」

山田「織斑先生wwwあれは一体www」

千冬「し、知らんwwwだがあれは予想外の動きだ、馬鹿にできんwww」

笑いはさておき一夏の攻撃を受けた鈴は衝撃で隙だらけである。零落白夜を決める絶好の機会。

ラオウ「決まったな。」

一夏「これで終わりだ——!!!」

鈴「きやつ!？」

しかし、一夏の攻撃は鈴に届くことはなかった。

チュド——ン!!!!

一夏「な、何が起こったんだ!？」

鈴「つつ?!一夏、あれ!!」

ケン「あれは!？」

山田「織斑先生！襲撃です!!レーダー反応無し謎のISです!!」

千冬「何だと!？」

突如現れたのは突然アリーナのシールドを突き破り飛来した謎のIS。その出現と共にアリーナ全体に異常事態が発生する。

山田「織斑先生、観客席の防壁がシャットアウトされています！生徒達の避難経路が確保できません!!」

千冬「警戒レベルが5に設定されているだも!?あのISの仕業か!」

この異常事態に観客席の生徒達は混乱し、我先にと避難経路に殺到するが、当然防壁は開きはしない。

ラオウ「うおお!?き、貴様ら落ち着かんか!」

セシリア「このままでは一夏さんと鈴さんが・・・」

ケン「くっ!まずは彼女達を安心させなくては……」

箒「一夏……」

一夏「うお!?あいつレーザーで撃ってきたぞ!」

鈴「何なのよあいつ!急に現れて……」

千冬「織斑、鳳、聞こえるか!?今突撃班がお前達の救援とあのISの制圧に向かってる。だが少々厄介な事に時間がかかる。お前達は無理をせず逃げる事に徹しろ!」

一夏「逃げろったって千冬姉!観客席の人達を見捨てることは出来ねえよ!」

千冬「今の状態のお前に何ができる!?それに観客席には霞、ジジ・ジジ……」

鈴「通信が遮断された!?あのISの仕業ね!」

一夏「クソ!鈴、救援がくるまであいつを引き付けるぞ!」

鈴「あんたならそう言うと思ったわよ!でも無理は禁物だからね?」

一夏「よし、行くぞ!」

セシリア「!一夏さん達が戦っていますわ!私達も救援に……」

ケン「駄目だ、防壁が閉まっていて移動ができない!」

セシリア「ケンシロウさんならあのシャッターぐらい壊せるのでは!?!」

ケン「駄目だ！人が多すぎて巻き込まれるぞ。」

「キヤー！ここから出してー!!」

ラオウ「ええい！どかんか貴様ら〜!!」

セシリア「・・・仕方ありませんわね。そういえば箒さんはどこへ？」

ケン「!?!」

鈴「あいつ見かけによらず速い!?龍砲が一発も当たらないなんて・・・」

一夏「鈴、あいつの動き何か変じやないか？人間ぽくないっていうか・・・」

鈴「確かにそんな感じはするわね・・・、そうと過程して何か秘策でもあるの

？」

一夏「秘策はないけどもしあれが無人機なら零落白夜が全力で使える!!残りの

エネルギーありつつたけぶつけるしかねえ！」

鈴「だめよ!もしその攻撃が外れたらあんた今度こそ本当に死ぬわよ!?!」

一夏「観客席には無防備な人達が沢山いるんだ、ここで逃げて皆が怪我したら俺は一

生後悔する！」

鈴「・・・あーもう!わかつたわよ!!んで具体的にどうする気よ!?!」

一夏「俺が合図したら鈴!俺の背中に龍砲を最大限にぶっぱなしてくれ!」

鈴「本当とんでもないこと考えるわねあんた? いいわ、何考えてるかわかんないけどやってやろうじやない!」

覚悟を決めた一夏と鈴のタッグチームは一か八かの賭けにでる。正体不明のISがレーザーをチャージする一瞬動きが止まる、そこを狙うのだ。そのISは何故かISの射出場に首を傾ける。

一夏「何だあいつ急に? あ、あれは・・・箒!?」

箒「一夏——! その程度の敵、その程度の敵倒せずとして何とする!?!」

鈴「ちよつ、何で出てきてるのよあの子? 危ない!?!」

謎のISは箒の声に反応したのかレーザーをチャージする。

一夏「箒——!! 鈴、やれえ——!!」

鈴「あくもう! どうにでもなれええ!!」 キュイーン ボヒューン

一夏「うおおおおお!! 間に合えええ!!」

一夏は叫ぶ。友を守らんと叫ぶ。ただ真つ直ぐ、敵に向かって刃を向ける。

一夏の剣は謎のISに突き刺さり敵を無力かした、かに見えた。しかし、一步遅かったのだ。レーザーは箒に向けて発射され、爆発が起きる。

煙が上がり、その場所には人影が見える。その姿は一夏にとって世界中で一番、自分の姉よりもヒーローに見えるものであった。

ケン「待たせたな、一夏！」

一夏「ケン!!!」

ラオウ「どおりや!!」 ドカーン

救助隊「す、凄い！扉が壊れたわ！これで救援に行ける！」

生徒達「ラオウくんありがとう！凄い頼りになるわ！」

ラオウ「つ、疲れた……。女どもを静めるのがこれほど大変だとは……」

ケン「箒、無事か？」

箒「あ、ケンシロウ……。助けてくれて、ありがとう……。だが私のせいで血が……!?!」

ケン「心配するな。こんなもの汗のようなものだ。それに……。後悔するはずがない！」

鈴「す、凄い!あの高出力レーザーを部分展開の片手だけで防ぐなんて……、普通にや死ぬわよあんなの。」

一夏「ケン、流石だぜ!!」

箒救出の余韻に浸る一夏達の背後では零落白夜によって串刺しにされた謎のISが、……また微かに動き始める!

ギツ、ギギギ、ヒヤツハ——!!

一夏「!?」

鈴「!?一夏、危ない!!」

セシリア「チエックメイトですわ!」バシユ——ン

タワラバ—— ドガ——ン

セシリア「一夏さんも鈴さんも詰めがあまいですわね。」ニコツ

一夏「セシリア!助かったぜ!」

ケン「流石だな、見事な射撃だ!」

セシリア「困った時はお互い様ですわ。」

鈴「ふくん、あんた中々やるじゃない。」

箒「皆、迷惑をかけて本当にすまない……」

一夏「・・・まあ確かに危ない行為だとは思ったけど箒は俺と鈴のこと心配してくれただら？ ありがとな！」

鈴「本当よ！ 次からは気をつけなさいよ？」

ケン「仕方ない、愛故に無茶することは俺にもある」

一夏「愛？ どうゆう意味だ？」

箒「ちよっ！ 何でもない!!」

千冬「まさか救助隊が来る前に片付いてしまうとは・・・」

山田「一次はどうなるかと思いましたが何とかこれで・・・あれ？ 織斑先生、リーダーに反応が!？」

千冬「何、まただと!？」

山田「しかも次ははつきりとリーダーに反応が！ ものすごく大きいです!!」
戦いに勝利した休息も束の間、新たな脅威が一夏達にせまる！

ケン「!? お前達！ 伏せろ!!」

ズズ————ン

一夏「おああ————、な、何だ!？」

新たに現れたのは巨大な I S、I S と言ってもいいのかわからないほどの大きさである。

「二、ニクイ……」

千冬「あれは一体何なんだ！ I S どころではないぞ!？」

山田「でも確かに I S 反応がああな機体から!」

ケン「……お前達は下がっている！こいつは俺が相手をする!」

一夏「いや、ケンでもこのでかさじゃ無理だつて!」

箒「こいつは尋常ではない！考え直せ！せめとラオウを呼んできたほうが……」

「ヒカリ……」

巨大な I S は構えを取る。その構えの型にケンシロウは身構える。

ケン「まずい……！逃げろお前達!!」

ラオウ「貴様らグズグズするな！死にたいのか?」

セシリア「ラオウさん？きやつ／／／／」

一夏「いつの間にも!? っっておわあ!!」

箒「なっ!? どこを触っているんだお前は／／／／」

ラオウ「静にせんか！ケンシロウ！とりあえずこやつらは避難させる。あのデカブツは片付けておけ！」

ケン「頼んだ。」

一夏「ラ、ラオウ！ケン一人で大丈夫なのか!？」

ラオウ「愚か者が、あの程度北斗の敵ではないわ！」

一夏「前から気になってたんだけど北斗って一体何なんだ？」

千冬「まさか霞のやつ一人であいつを倒すつもりか!？」

山田「でももしかしたらケンシロウ君なら本当に倒してしまいかもしれません

よ。」

千冬「有りうるな……。山田先生、救助隊に連絡を。退避命令だ。」

ケン「その構え、まさかとはおもうが羅漢仁王拳！そしてその巨体、デビルリバー

だな?」

「トジコメタヤツ ニクイー!!」

その巨体から繰り出される風圧による巨大な衝撃波は龍砲の何十倍もの威力である。まさしくそれは羅漢仁王拳の奥義、「金剛風殺拳」である。

ケン「はああああああ!!」

ケンシロウはISを展開し金剛風殺拳を受け止める。受け止めなければ流れ弾に他の者が巻き込まれるための、以下仕方がない被弾である。しかしケンシロウにそのような攻撃は通用しない。

ラオウ「一夏よ、貴様がケンシロウを追いかけると言うのなら見届けるがいい。勝てないとわかっている勝負でも逃げは許されない。それが北斗の掟だ。」

一夏「北斗の掟・・・」

ケン「デビルリバーズよ!再び地獄に帰るがいい!」

ホ————オワタア————!!

デビルリバーズの頭部に向かって飛ぶケンシロウに対して巨大な両手でケンシロウを握りつぶそうと圧をかける。

ケン「うおおお——、はああああ!!」

デビルリバースの両手は爆散、粉々に砕け散る。その隙にケンシロウは頭部から真下一直線に降り立つように落下し渾身の拳を放つ。

北斗神拳奥義 北斗七死星点

ピブ—— ボギヤツ、メギツ!!

「ア、アディキ……、イデエーヨー」 ドグワア——ン

ケン「転龍呼吸法によって極限まで高めた渾身の力を持って秘孔を突いた。貴様の内の部の部品は全て内側へへし折られ、あとは死あるのみ!あの小さい機体と共に地獄へ帰るがいい!」

千冬「何て奴だ、霞は人間か？」

山田「凄い格好いいですね／＼／＼ラオウ君とどっちがいいんでしょうか?／

／／／

ラオウ「お前達もあれぐらい倒せるように修行しろ!」

一夏箒セシリア鈴「無理に決まってるだろ!!」

斯くして、ケンシロウ達に迫った最初の脅威は何とか避けられた。この先ケンシロウ達に待ち受けるものは如何に？

しげ子「次々回に続く——!!」

